

### 第3回西成特区構想有識者座談会 議事録

日 時 平成24年7月9日（月）午後6時5分～午後9時5分

場 所 西成区役所 4階会議室

○柴生課長 皆さん、大変長らくお待たせいたしております。

ただいまから、第3回の有識者座談会を開催させていただきます。

本日、司会させていただきます西成区役所総合企画担当課長、柴生でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日、寺川委員は若干遅れて来られるということで、連絡が入っておりますので、ご了承ください。

簡単に事務局から、今日ご参加の先生方をご紹介をさせていただきたいと存じます。

まず、座長の鈴木亘先生でございます。

○鈴木座長 よろしくお願ひします。

○柴生課長 それから、副座長の水内俊雄先生でございます。

○水内委員 よろしくお願ひします。

○柴生課長 それから、今日、メインでお話をいただきます阪南大学の松村先生でございます。

○松村委員 よろしくお願ひします。

○柴生課長 それから、水内先生の隣でございますけれども、釜ヶ崎のまち再生フォーラムのありむらさんでございます。

○ありむら委員 よろしくお願ひします。

○柴生課長 それから、大阪自彊館の織田さんでございます。

○織田委員 よろしくお願ひします。

○柴生課長 それから、医療福祉ジャーナリストの原さんでございます。

それから、本日のゲストスピーカーということで、特別にお越しをいただいております大阪府簡易宿所生活衛生同業組合理事長の山田理事長でございます。

○山田理事長 山田でございます。

○柴生課長 大阪市立大学の福原先生でございます。

○福原委員 よろしくお願ひします。

○柴生課長 以上のメンバーで本日、開催させていただきます。

それでは、鈴木座長、よろしくお願いいたします。

○鈴木座長 ありがとうございます。それでは、今回、第3回から、具体的な個別テーマに入りまして、この有識者座談会の議論をしてまいりたいと思います。今日は、ちょっと盛りだくさんでございますけれども、国際観光、観光振興策、ターミナル化、屋台村構想について松村委員のほうから、ご報告をいただきまして、その後、いろいろ議論をしてまいりたいというように思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

それでは、松村先生のほうにバトンタッチいたします。よろしくお願いいたします。

○松村委員 ありがとうございます。

本日は、国際観光と観光振興策、ターミナル化、屋台村構想についてお話しさせていただきます。スライドを用意してきましたので、それを皆さんに見ていただきながら、お話しさせていただきたいと思います。

それで、この有識者座談会という場は何かを調整するような場じゃないと伺っております。基本的に私個人の意見、個人の見解を述べさせていただきます。その辺もお含みいただいて、聞いていただければと思います。

ふだん、私は、阪南大学国際観光学部で教員をやっているんですけども、新今宮、町名でいうと、太子1丁目というところで、学生ボランティアと一緒に新今宮観光インフォメーションセンターというのを運営しています。

ご案内のように、太子1丁目を中心として、最近では外国人の旅行者がかなり訪れてまして、推計ですけども、年間10万泊くらい入っていらっしゃいます。現に今日も私は太子1丁目から来たんですけども、隣にはる山田理事長のところのホテル中央セレーネのロビーにはコロンビア人の方が大勢いてました。話を伺うと、今、堺のほうでフリスビーの大会があって、そのコロンビア選手団が、ざっと四、五十名ですかね、このセレーネに泊ってらして、セレーネの隣のホテルにいくと、オランダ人の選手団が泊まっているような感じで、最近、ここ数日くらいは、新今宮にフリスビー選手団の外国人がたくさんいてるという状況です。そういう中で、インフォメーションセンターをやっている、ふだんから、いわゆる外国人旅行者と最前線で接しているので、その辺の現場感覚を踏まえながら、いろんな話をさせていただきたいと思います。

一応、タイトルは「国際観光振興・賑わい創出を中心としたあいりん地区の活性化について」ということでお話しさせていただきます。

まず、最初にグランドデザイン大阪という構想についてふれさせていただきます。西成特区構想のほうではこのグランドデザイン大阪を余り考慮してないと思うんですけども、西成特区構想はグランドデザイン大阪と連携すべきだと考えます。

左のほうの図これが、あいりん地区ですね。環状線を越えると、その北側は浪速区ですね。天王寺動物園は天王寺区で、その南側は阿倍野区という状況があります。通天閣がここにそびえ立っておりまして、こちらのほうにはたくさんの観光客が来ている。通天閣のある浪速区から環状線を隔てて、ジャンジャン横丁の高架をくぐるとあいりん地区に入るという形ですね。

スケールでいうと、これが300メートルのスケールなので、おおよそ、東西には800か、900メートルくらいですね。南北にも、800か、900メートルくらいの形となっております。次にこの右の図のほうがグランドデザイン大阪という構想なんですけれども、簡単にいいますと、なんば地域と天王寺・あべの地域がありまして、天王寺・あべの地域をつないじゃおう、1つの空間として見ていこうという発想なんです。この辺が、なんばHatchがあるあたりで、その南側のここら辺が再開発の進んでいるあたりで、木津の卸売市場があるあたりですね。道頓堀はこちらにありまして、千日前があつて、でんでんタウンが通つて、その1本裏がオタク通りと言われてます。こちら側には上町台地の寺町があつて、四天王寺さんがあつて、動物園があつて、ここに通天閣・新世界があつて、あいりん地区はそれに隣接する形であります。あいりん地区のすぐ東側にはあべのハルカスとQ's MALLがあります。

グランドデザイン大阪はこの地域を一体化しようという発想でありまして、実はこのQ's MALLのあたりからずっとLRTをミナミへ引っ張って、もし、本当に実現するとなると、観光遊覧LRTみたいになるかと思うんですけども、路面電車を引っ張ることによって、ここを1つの地域としてプロデュースしていこうという話になってます。

それで、西成のにぎわいを創出するという観点でいいますと、間違いなくこういう流れがあるかと思うんですね。なんば方面から西成のほうへお客さんに来ていただいて、通天閣からこちらに来ていただく、それと、あべのハルカスから来ていただく。私のゼミでつくりました「新世界・西成食べ歩きマップ」というのがあるんですけども、これなんかまさに、新世界に来るお客さんに新世界と西成は近くて一体化しているということを、実は分かっていたらこうという発想でつくっているものなんです。

続けて、逆に、西成のほうからグランドデザイン大阪を考えていきますと、この地域が実は外国人が非常に多い、町丁名でいうと、太子1丁目というところなんですけれども、ここが事実上、国際ゲストハウス地域として、もう機能しています。外国人観光客が宿泊して、滞在する拠点となっています。もう一つ、今回のお話でさせていただきたいのはこの地区ですね。JR新今宮駅と南海新今宮駅があるあたりを新今宮のターミナルとして整備するというお話です。この二つの地域ができると、恐らくこういう流れが逆に出てくるんです。新今宮のターミナルに客が集まって、新世界方面へ行く、なんば方面へ行く、外国人がたくさん泊まっている太子1丁目から、ハルカスへと歩き、通天閣方面へ遊びに行くという流れです。

実はこの右の図の空間スケールを観光地理学の立場でいうと、北京の天安門広場から故宮博物館のあたりとほぼ同じくらいなんです。

これが北京のグーグル画像ですが、これが故宮博物館でここに天安門広場があって、ここに前門のいわゆるショッピングストリートがあります。これと、天王寺からミナミまでのこの地域が、全く同じ空間スケールすとんと、こう、落ちるんですね。北京に行かれた方ならよくわかると思うんですけど、この辺は徒歩圏内なんです。ここで別にタクシー乗る人もいないし、いろいろと見どころがたくさんあるんで、ずっと歩いて行かれるわけです。ぐるぐると、半日、1日かけて。それでいうと、天王寺からミナミにかけてのこの空間スケールというのは、充分歩いて回れる距離なんです。これが実は非常に大事なところなんです。新今宮観光インフォメーションセンターに来る外国人旅行者にも尋ねられるのですが、「なんばまで歩いていけるか」って。私たちは「歩いていけます」、「30分もあれば十分です」と答えます。途中におもしろいところいっぱいありますよ。でんでんタウンをとおもしろいし、黒門市場もありますし、オタクロードをとおって、道具屋筋を抜けてくてもいいです。天王寺からミナミへ行くルートは、実は、すごく魅力的なまち歩きルートなんです。これを一体的に考えないという手はないということです。

それでちょっと、テキストのほうの説明に移っていきますけれども、グランドデザイン大阪というのが、ついこの前、府市統合本部のほうで了解を得られたようです。なんば・天王寺だけでなく、いろんな大阪城とか、中之島もの構想もあるんですけど、基本的に僕らとかかわりのあるところと言えば、なんばから天王寺にかけてですね。これと、西成特区構想というのは、やっぱり連携していくべきで、天王寺からミナミの地域が一体化していて、西成区のこの地域が抜けるというのは、もうあり得ない話なんです。むしろ、

ここも含めて、三角公園のほうまで含めろとはいいません。新今宮のターミナル地区と、外国人がたくさん宿泊している地区、せめてこの辺くらいは含めてもいいんじゃないかなと。含めることによって、いろんな相乗効果があるんじゃないかと考えています。

それと、この辺は区の境界が交錯しているところなんですね。この地図でいうと、環状線から北側が浪速区ですね。ここから上は中央区で、こちらが天王寺区、阿倍野区、西成区ということになります。ちょうど、今、大阪が抱えている区政改革も絡む話なんですね。新今宮駅をターミナル化するに当たっては絶対浪速区との連携が必要ですし、LRT通すに当たって、天王寺区やとか、阿倍野区との連携も必要になってくるということですね。

近い将来、こういうふうな大きなグランドデザインを進めていくに当たっては、多分、まちづくりの推進協議会みたいなのをつくっていかなだめで、広域エリアマネジメントをしていかなだめやと思うんですね。

実は、天王寺あべのまちづくり研究会というのを、私が呼びかけて、最近、天王寺・あべの地区で立ち上げました。近鉄、南海、阪堺、JR、ハルカス、Q's MALLなどに入っていて、今動き始めています。これは天王寺・あべの話をする場なので、基本的に話題になるのは、この範囲だけなんですけれども、動物園も入っています。この天王寺・あべの範囲で話をして、ある程度固めて、こちらの浪速区の通天閣あたりは今、100周年でいろいろな組織が立ち上がっているんで、こことすり合わせて、日本橋やミナミの辺ともすり合わせて、1つのグランドデザインを描いていこうかという流れになりつつあります。私は西成もこのグランドデザイン大阪に、将来的には絶対関わっていくべきで、あいりん地区全体の話というよりも、むしろ、太子1丁目といわゆるターミナル機能が求められるここら辺ですね。その辺は連携して行くべきやと思っています。

その際に、考えないかんことは、どういうふうな形で戦略にことを進めるのかということです。1つは太子1丁目を中心とする国際観光客の宿泊滞在拠点ですね。これは実は、日本にそうないんです。外国人旅行者の集まる観光地はあっても、宿泊滞在する拠点というのは実は日本には少なく、関西圏で考えられるのは、もう、あいりん地区しかない状況です。外国人旅行者が周遊する起点ですね。日本のどこへ行くにしても、ここから始まるというところですね。大体、観光地は旅の終点なんですよ。この地域は旅の起点になるところなんで、いろんな仕掛けができるという、そういう意味ではポテンシャルがすごく高い。

あと、新今宮のターミナル機能の整備もとても重要で、これをやっていかなだめやと

思っています。まあ言うたら、なんば、あべのから客を誘う仕組みや仕掛けが要ることと、逆になんば、あべのへ客を送り出すということ。先ほど出てきていましたこのLRT構想ですね。天王寺からミナミへLRTを新しくつくるとしても、阪堺線がもう既に通天閣のすぐ西側まで通ってますんで、それを当然結合するという話も出てくると思います。

LRTでうまいこと、西成も囲うような形で天王寺からミナミへのループが描けたら、これは、画期的な観光周遊ルートですね。すごくのんびりとLRTで遊覧できるようなものになると、魅力のある地域をつなぐだけに観光という点からは、お客が呼べるものになると思います。それと、新今宮のターミナル化で欠かせないのが、フェスティバルゲートの跡地問題です。これは、大阪市が頭を悩ませているやつなんですけれども、これも、後で触れます。

全体的な西成特区構想からいうと、1つのキーワードは集い、憩うという話があると思うんですね。コレクティブタウンにしてもそうで、日雇い労働者が集い、生活保護のおっちゃんも一緒に過ごしていくという、そういう意味でいうと、その中に外国人とか、国内観光客がその中に入れてもいいんじゃないかなというのが、全体的な構想の中での位置付けですね。

それと、もう一つ、西成特区という、特区という名前がついてますので、ここで大事なことは、特区らしいことをやっぱり考えていかなあかんということです。あいりん地区の地域課題を解決することの中から、解決を見出したら、それを他地域へ応用できるような変革の手法であるとか、制度の構築であるとか、多分生活保護の問題なんかそういう発信ができると思うんですけれども、観光開発でも実はできると思ってます。そういうふうなものを模索して行って、言うたら、西成モデルといいますか、西成ではこうやっているんなものを解決していったというのを確立して、それを特区ならではの試みとして位置づけて発信していくべきやと思います。考え方とすれば、こうなったらええのになんというのは皆さん思っているわけですね。この有識者座談会のメンバーは皆さん、非常に現場のことをご存じなんで、現場のここはこう変わればこうなるのになんというのをいっぱい持っていると思います。ですけれども、いろいろな市やとか、府やとか、区の規制があったり、いろいろなお金の使い方が難しかったり、そんなんで、いわゆる、何かこうやったらいいのになんというのがあってもなかなかできない、そういうのを片っ端から出して行って、みんな、しらみつぶしにつぶして行って、それで、そっから、他の地域へ応用できるものは、発信し

ていったらいいんじゃないかなという気がしています。

続けて、私の認識なんですけれども、あいりん地区とよく言われますけれども、私の感じではもうかなり地域機能が分化しているというイメージがあります。特に急激な地域機能の分化というのは、1990年代の後半から始まったと思うんですけれども、それに伴って、地域の課題も本当に多様化しています。

例えば、この山王1丁目、2丁目ですね。このあたりの問題というのは何かというと、労働者が泊まっていることは、もうほぼないです。外国人の観光客も、若干、ゲストハウスがあるんで、泊まっているんですけれども、基本的にはない。この地域で何が課題かというと、やっぱり老朽化した木造低層の住宅が密集していることなんですね。だから、ここに関していうと、地域の課題は居住の問題なんです。だから、やっぱり防災をどうするのかとかが大切です。それともう1つ、この地域を学生と一緒に歩くとよく言われるんですけれども、大阪出身でないやつでも、何か懐かしい感じがするというんですね。絶対知らんはずなのに、懐かしいと思う風景が残っているんで、そういう意味でいうと、日本人のイメージの中の生活原風景みたいなんがある。そういうのを保存したり、また、新しい住まい方を提案したり、これは寺川先生にお願いせなだめなんですけれども、そういうふうなところですね。

それと、観光の側面からいくと、コミュニティ・ベースド・ツーリズムというのがあるんですけれども、まあいうたら、生活している人と一緒に生活を見たいなツーリズムがあります。これは大阪府のほうでやっていたんですかね。エコミュージアムという概念があって、いわば下町体験野外博物館みたいな、別に何か、ほんまに箱ものの博物館をつくるんやなくて、街なかでそういうのを体験できるというもの、それと、大阪市がやっているH O P Eゾーンという景観修復事業なんかとこれをうまく組み合わせて、ここでコミュニティ・ツーリズムみたいなのができたらいいなと思っています。そうしたツアーで生まれたお金が地元に戻元できるような仕組みができれば、いろんな意味で回っていき始めるかなという気がしています。

それと、例えば、山王3丁目という地区があるんですけれども、ここはむしろ飛田という名前を通っているかと思うんですけれども、ここは山王1丁目、2丁目とは違う文脈で動いている地域ですね。それと、太子1丁目、ここは今回お話しする外国人旅行者の宿泊滞在が多い地区です。それと、この太子2丁目と天下茶屋北1丁目というのも、実はこれは地区的にはもう、老朽化したところが多いく、外国人旅行者も余り踏み込んでいないと

いうところですね。

萩之茶屋1丁目はここにセンターがございますので、日雇い労働市場が残る地域で、生活保護受給者も比較的多いというところですが、このあたりに何軒か外国人を受け入れているホテルもあります。あと、萩之茶屋2丁目に関していうと、ここは簡宿もあるんですけども、福祉マンションもあって、簡宿、福祉マンション、簡宿、福祉マンションみたいな、そういうふうに混在している地域ですね。現役の労働者が比較的多く泊まられているのは、多分、このあたりやと思います。このあたりか、太子1丁目の南側あたりが現役の労働者が泊まっていっぱいところ。それと、萩之茶屋3丁目は、ここに三角公園がありまして、実は後でいいますけども、簡宿はもうありません。ほとんどはもう福祉マンションに転業していて、まだ、深刻な野宿問題ほか、いろいろな問題、非合法のカジノがあったりとかいう問題を抱えているところですね。

私が言いたいのは何かというと、このように地域の機能がもう既に異なってきてますので、地域によって将来の戦略や政策も当然異なっていくべきであろうということです。

私が学生たちと活動しているのは、この太子1丁目なんですけれども、萩之茶屋で活動していっぱいの方は、多分私たちの活動のことを全くご存じないと思います。それだけ実態として事実上、地域機能が分化しているということですね。もはや、「あいりん地区は」というような一般論で、絶対この地域は語れません。私はそういう印象を強く持っています。

それで、この有識者座談会のメンバーを見ていると、太子1丁目から山王へかけての地域を語るのは多分私だけではないのか、と思います。私以外の皆さんは、地域でいうと、萩之茶屋を中心とする大体この辺のことに詳しい方々なんです。生活保護の問題に関しては、地域を超えてもっと汎用性がある話だと思いますが。

今回、私のほうから提案させていただくお話は、おおよそこの3つの地域、つまり太子1丁目の大阪国際ゲストハウス地域、JR新今宮駅から南海新今宮駅にかけての新今宮ターミナル地域、山王1丁目から2丁目にかけての地域です。パワーポイントの図では、この辺、センターまで入れていますが、別にセンター全体をどうしようという訳じゃなくて、新今宮ターミナル地域を考える中で、センターをどうするのかという問題も考えていこうということです。萩之茶屋小学校はとりあえず私のほうでは、全くふれません。ターミナルというときくまでもこのあたり、JR新今宮駅と南海新今宮駅あたりが話題の中心です。

あと、この地域には線状に走る重要なところがありまして、たとえば、この大通り、幹線道路ですね、それと地元の商店街、動物園前1番街、2番街、こちらの萩之茶屋や今池本通りの商店街。それに加えてこの堺筋と、旧紀州街道でもあるこの釜ヶ崎の銀座通りですね。こうした商店街や大通りも、観光振興という点からはとても重要になります。

まず最初に、どうしてもやっとなあかんというのが、一応、名前は仮称としていますが、大阪国際ゲストハウス地域です。この地域を、ネーミング、ゾーニング、プランニング、プロモーションするということを言ってますけど、要は名前をつけて、線を引っ張って、ちゃんと計画立てて、みんなで宣伝しましょうという話なんですね。

名づけというのは、実はとても大事で、「あいりん」という名前ができたからあいりん体制ができたようなもので、名付けは非常に大事なことだと認識しています。次に位置づけとして大事なものは、最近の傾向では、外国人だけじゃなくて、国内の観光客もこの地域にはすごく増えています。だから、国内外からの来訪者向けの宿泊滞在拠点というところ、つまり観光地じゃなくて、宿泊滞在拠点という位置づけが大切です。それと、名前に関してなんですけれども、実は、簡宿組合の中に大阪国際ゲストハウス地域創出委員会、通称OIG委員会というものをすでに立ち上げて、今までずっと活動してきました。だから、一応仮称でこういう名前をつけてるんですけども、これは、固有名詞でないわけですね。単語の合わせ技なんですね。大阪、インターナショナル、ゲストハウス、エリアと一般的な単語をつけてるだけなんで、本来は、やはり固有名詞のほうがいいんですね。私たちがやっている新今宮観光インフォメーションセンターは、このあたりにあるんですけども、そこは戦略的に「新今宮」という地名を選びました。なかなか「釜ヶ崎」観光インフォメーションセンターというのもあり得ない話やし、「あいりん」というのもおかしい、「西成」もおかしい。やっぱりこの辺はターミナルということもあり、JRも南海も新今宮駅と名付けているので、やはり新今宮が一番通りがいいやろうということで、観光客向けに「新今宮」という言葉を使ったんですね。

タイのバンコクにカオサンというバックパッカーが集まる街があるんですが、ここは決してタイ国際ゲストハウス地域と言うてるわけじゃなくて、あれは「カオサン」という地名で通っています。この地域もブランド化するんやったら、何か1つの地名でいったほうがええ、私は「太子」でもええかと思います。

それと、ゾーニングとプランニング、線引きと計画というのは、これがやっぱり必要で、このイメージ図でいうと、まず、面と線と当然幾つかの点があるわけですね。これが大事

で、点から線へ、線から面へという、これはべたな都市計画の話です。それで、大事なのは、線沿いですね。例えば、堺筋沿い、幹線道路沿い。あと、この面の中は、できれば、特定産業の立地を促進するような政策的な誘導、立地誘導がやっぱり必要になってくると思いますね。こういう産業がきてほしい、こういう産業はきていらん、きていらんというたら問題かもしれませんが、こういう産業を呼び込みたいという、積極的な言い方ですと、それが実は大事ですね。それともうひとつ大事なのは、点を、一つ一つの点をやっぱり強化する必要があります。その点を強化する。点というのは例えば簡易宿所なんですけれども、簡易宿所にお客さんが入っていないにもかかわらず、なかなか労働者向けの簡易宿所から変われず、外国人を受け入れられないと、そういうところに対してはできれば、変容を促すような助成制度というのがやっぱり要るんかなと思います。ある方向へ誘導していくという意味では。

それと、あとプロモーションなんですけども、名前をつけて、例えば、ここが新今宮エリアというふうになって、それが例えば、大阪市の施策であるとか、公的発信、もしくは、対外的な発信のところで、新今宮ホテル街みたいな感じで使っていただくと、それ自身が宣伝となって、信用を生むということになります。そのネーミングを利用していくことによって、集客効果も高まると思います。それだけで絶対高まると思う。例えば、国内のご年配の観光客の方なんかやと、いまだにやっぱり、西成、あいりんというのと、差別がすごくあって、偏見もあるところです。それを例えば新今宮ということで、別の方向から打ち出していくと、インパクトはあるんかなという気はしています。

それと、これも、前々からいろんなところに働きかけてはいるんですけども、なかなかできてないことがあって、要は地域の中での標識や看板のたぐいの多言語化ということです。これが、なかなか実はできないんですね。

以前に何回も隣にいる簡宿組合理事長の山田さんと一緒に、あちこちへ標識や看板を設置して欲しいと陳情しに行ったことがあります。ややこしいのは、その道路が府道ならば府へ行け、市道ならば市へ行け、信号のところならばそれは警察、ここは消防とか、強烈な縦割り行政でたらい回しにされました。それを地域で私たちみたいにボランティア活動やっている人間に、全部個別に交渉しに行けっていうんですね。本当にやめてくださいよと叫びたくなりました。看板1枚立てるのもとにかく大変なんです。府市統合という意味では、一番わかりやすく、道路に1つか2つでもええんですけども、その府市統合の象徴となるような看板をぼんと立てて、ここは本来、こことここに話を通さなあかんねん

けども、府市が連携してるからすぐ話がうまくいったみたいな、何かそういう小さな成功事例を積んでいかなあかんと思います。細かい話でいうと。それができると、逆にあの西成が変わっていったるな、あいりんが変わっていったるなというのを、打ち出せます。こういう話を西成発信で、当然西成の中でも進めていきながら、大阪市政にも働きかけていくというのが必要やと思います。

続けて、次に、集客の核となる簡易宿所の現状をちょっとお話しさせていただきます。実は大阪市全域に簡易宿所と呼ばれるのは105軒あります。この105軒、大分内容は変わってきて、2011年の統計なんですけれども、20年前とは大分様相が変わってます。20年ほど前のいわゆる簡宿の全盛期というのは二百数十軒あって、ほとんどがこのあいりん地区にあったんですね。あいりん地区と違うところにあるものならば、例えば長居公園のユースホステルなんか簡易宿所やし、カプセルホテルも簡易宿所に入っているんです。

この105軒のうち、現在、65軒があいりん地区内に分布しています。簡宿免許を持っているところですね。簡易宿所から福祉マンションに変わると、基本的に簡宿免許は放棄せなだめなんです。結局残っているのは65軒だけなんです。あいりん地区で簡宿が減った原因はわかりやすく、福祉マンションがふえて、簡宿免許を放棄した結果です。あと、2009年の夏からなんですけれども、簡宿免許はそのまま保持しながら、福祉を受け入れるという、福祉併用型の簡宿というのが認可されるようになりました。

とはいえ、もう65軒しか残ってなくて、地域の収容定員を西成区役所をお願いして調べていただいたんですけれども、1日大体5,300室なんです。これがフルに埋まったら、あり得ない話なんですけれども、フルに埋まったら、約200万弱になります。年間に200万弱の人間を収容できるということです。1日のキャパが5,300室あるわけですね。そこで労働者が大体どれくらいいるのかというと、これはありむらさんに聞いたらいいんですけど、今では2,000から3,000くらい動いてると思うんですね。2,000から3,000とすると大体年間の宿泊需要が70万泊から100万泊なんです。現在、外国人と国内の観光客がどのくらいあいりん地区に入っているかというと、大体、外国人が10万くらいで、国内観光客が40万くらいですね。実はこの観光客の宿泊が倍増しても、収容能力という点からは、まだまだ、現時点では余裕があるんですね。だから、よく、外国人がふえると、労働者が追い出されるというけれども、そんなことは、別になくて、がらがらのところがいっぱいあるんで、空いているその部屋が全部埋まれば、倍増というのはそんなに難しい問題ではない。

次にもう一つ重要な点なんですけれども、この簡宿に関しても、地域機能が分化して、これを見ていただくとわかるんですけども、実は簡宿が残ってるところというのは、太子1丁目の24軒、それと萩之茶屋1丁目の20軒、それと、萩之茶屋2丁目の18軒です。あとの地域には、もう簡宿はないんですね。萩之茶屋3丁目に簡宿が2軒ありますけど、このうち1軒は事実上廃業状態で、もう一つのほうも非常に規模がちっちゃい。山王3丁目の飛田のあたりにも2軒ありますが、こちらも規模が小さい。

実は簡宿が生き残っている地域というのは、太子1丁目、萩之茶屋1丁目、萩之茶屋2丁目というこの地区に限られてます。この地区というても、まんべんなくあるわけやなくて、主にこの大通り沿いにあるんですね。大通り沿いに。ただし、ちょっと問題なのは、簡宿、福祉マンション、簡宿、福祉マンション、福祉マンション、という具合に続いていて、簡宿と福祉マンションが混在しているのも事実です。もともとは簡宿1色やったのが、福祉マンションがふえてきたことによって、簡宿と福祉マンションが複雑に混在しているという状況があります。太子1丁目のこの辺に関しても、太子1丁目の一番外国人を集めているこのあたりに関しても、状況は同じです。やっぱり、福祉マンションの間に簡宿があったり、簡宿の間に福祉マンションがあったりという、混在状況は変わりません。けども、1つ言えるのは、もう萩之茶屋3丁目には事実上簡宿はないんですね。簡宿がないので、観光振興という点からは入り込む余地がないため、余り考えなくてもいいというところですね。

それと、簡宿の3層化ということを私は言ってます。1つは外国人を受け入れて、それでうまく成功して、それを起爆剤として国内の観光客も入ってきて、事実上、簡宿から国際ゲストハウスに転業して成功しているというところなんです。これが、10軒くらいあるのかなという感じがしてます。二つ目としては、実はまだ元気な簡宿というのもたくさんあって、稼働率が80、90%いくような簡宿も実はまだあります。それは別に外国人とか、国内観光客が来ているんやなくて、労働者が泊まられてるというところがまだあります。そういう形で現状維持しているところが20軒くらいあるんやろなという感じです。あと最後に、立ちすくむと書いてますけども、どないしてええかわからんようになってる簡宿が30軒くらいある。この生き残った60軒の内訳は何となく、そんな感じやと思うんですね。福祉マンションにいかうかな、このまま放つこうかな、もうとりあえず、私たちが生きている間はこの簡宿をやっとくけども、もう死んでもうたら、どないなるかわからへんなみたいなどころがあるんですね。それと、あともう一つ大事なのは、すでに立ち枯

れているところがたくさんある点です。実は外国人を受け入れている太子1丁目にもあります。元気な地域でも、簡宿の建物が廃業状態でそのまま残っている。廃墟と化している。もしくは、その跡地が駐車場になって、ぼこんとあいてるといのが、この大通り沿いとかにも割とあるんですね。それが現状です。

次の図、ここに打ってある点は、かなりリアルなんですけど、国際ゲストハウス地域という面ですね、それと、点と線の話をしたと思います。赤色の星印がいわゆる元気なところ、外国人を受け入れている元気なところ、黄色の丸印は外国人受け入れなくても元気なところ、あと、青色の三角印は今後どうしようかなと思てるようなところ、実はこの黄色と青色の差っていうのは、実はすごく微妙でつけにくく、もっと内実に踏み込まないかなんですけども、現状でいうと、こんな感じですね。

それで、この地域に限定して考えると、国際ゲストハウスが10軒、すでに外国人をたくさん受け入れてはるんですけども、当然のことながら、こうしたところのサービスも洗練してかなあかんし、充実させていかなあかんということで、例えば、大阪集客プラン事業みたいに、上限100万円、半額助成くらいで、1,000万円くらい予算つける。これを利用するのかせえへんかは別にして、100万円のできる仕事って大したことないと思うんですけども、こういう方向に行くんやよというのを、何か示すということが大事な気がします。それと、今、現状維持している簡宿があるんですけども、これには基本的に将来的にいうと、日雇い労働者の数が激増していくというようなことはもう考えにくい状況やと思うんですね。減っていくことを頭の中に入れながらすると、どうしても、国際ゲストハウス化して、外国人も受け入れて、国内の観光客も受け入れていくということですね。後で山田理事長からも、説明していただいてもいいかと思うんですけども、簡宿の経営とゲストハウスの経営って全く違うんですね。もう全然違います。例えば、簡宿というのは基本的にセンターで求職される労働者の方が泊まられているので、フロントがあくのは朝の3時くらいから8時くらいまでですね。その間はフロントをあけていて、労働者が早朝に簡宿を出てセンターへ求職に行かれるわけですね。それが終わると、ピシャッとフロントのシャッターが閉まるわけですね。フロントが再びあくのが、労働者の方が帰ってこられる夕方4時から5時くらいなんですね。それで10時くらいになると、またピシャッと閉めるわけですね。こんなところになかなか観光客は泊まれません。その経営を根本から変えようとするのは、非常に勇気が要ることなんです。それはなかなか容易にはいかないのが現状なんで、それを何か、やっぱり、変えていく方向を示す必要があるかと思

ます。

それと、簡宿の経営を変えていくときに、やっぱり何らかの目標設定があって、これが規制になると嫌なんですけれども、例えば、観光客を受け入れますよ、外国人も受け入れますよとなってくると、例えば、フロントをあけるのを24時間とまではいいませんが、昼間もあけてくださいとか、あと、コミュニティスペースをつくってくださいとか、シャワールームくらいつくりましょうよとか、何がしかの基準を設けて、それを目標にしてみんなで進みましょうというのが、いいのではないのでしょうか。そういう目標に向けたハードとか、ソフトの改善、そっちに何か補助を出すみたいな形で20軒なんで、100万円上限で半額補助の2,000万円くらいですか。

次の3つ目の大きな問題は、立ちすくんでいる簡宿というのがやっぱりあるわけですね。これは何かというと、私の知っているところでは例えば、簡宿の名義がおばあさんの名義になって、おばあさんがもう高齢化されていて、そこを経営されてる方がどうしようかなと悩まれている。おばあさんが亡くなったら、相続せなあかんねんけど、兄弟がたくさんいるし、どないしたらええかわからん。そういう状況の中では、なかなか投資できないみたいな話があって、複雑な問題が絡んでいます。そんなところがいっぱいあるんですけれども、そういうところは例えば、簡宿免許交付を特区限定で規制緩和をしていくことなんか、できたらいいんじゃないかなと思います。簡単にいうと、かつての規制に近い状態での新築を認めるみたいな、そうすれば例えば、不動産価値もかなり上がると思うんですね。そうなれば、投資しようかという人間が出てくる。

簡宿って、とにかく規制が厳しいんですね。できたときの簡宿の規制と今の規制が全く違って、山王1丁目、2丁目にある長屋もできた時は何の違法性もないけども、現在の建築基準法で見るともう全部アウト、アウト、アウトで、既存不適格建造物になっている。あの状況と全く一緒に、簡宿もできたときには何の問題もなかったけども、そこからどんどん規制がきつくなって、今の姿は違法状態というか、適合性に欠けるということで、もういっぺん建て直せない。建て直すんやったら、こういう基準でというのが、すごく、複雑になってたり、厳しくなってる状況あるんで、それで立ちすくむんですね。

だから、実は山王地区あたりの老朽化した住宅を建て直せないという問題と、簡宿が立ち枯れていくという問題は、構造的には一緒です。規制に絡めとられていて、どなしうもなくなっているんです。

一般的なホテル経営の場合ですと、不動産の所有と、ホテルの経営と、ホテルの運営の

分離が可能になり、再投資や経営の改善が促進されます。ところが、一般的なホテル経営ではよくあるんですけども、不動産を持っていらっしゃる方とホテルを運営されてる方が別々というのはよくあるわけですね。リーガルロイヤルとか、ああいう有名なホテル、大体外資系はそうなんですけれども、ホテルはだれかオーナーが持っていて、運営は運営会社があって、ホテルのブランドを利用して経営しているわけです。けど、こうしたことが、実は簡宿ではなかなかしにくいんですね。もしやるならば、所有権ごと買い取れみたいな話になってきて、そんな重たいことできませんよというのがあるんですね。

それと、立ち枯れているところや跡地の問題なんですけども、これは非常に大胆な提案なんですけれども、例えば、時計を三、四十年前まで戻して、そこがもともと簡宿やったところは、同じ基準で建てられるようにしたら、簡宿街がもう一遍、再生するのかなという気がします。立ち枯れした簡宿やその跡地利用で、かつての基準で簡宿免許を再交付できるようになると、また簡宿が建つわけです。簡宿の1つの大きな特徴は部屋が狭いということがあるんですけども、これが、立ち枯れて、例えば、駐車場になると、車がわずか5台か6台くらいしかとめられない状況になるわけですね。敷地面積がとても狭いので。それは実は地域とすると、何かすごい使い勝手の悪い、死にスペースができていくという形になります。かつての状況に戻そうとすると、こういうふうな特例措置がなかったら、なかなか戻れへんのと違うかなという気がしています。これも、別に全部が全部を戻せとはいいません。ゾーニングして、例えば、この中だけはそういうふうにもとに戻していきましょうよという発想です。そのくらいの何か大胆さがなかったら、無理なんちゃうかな、時計戻すくらいの。

次にゲストハウス地域創出への潮流づくりについて話を進めて行きます。ゲストハウス地域づくりへの潮流という話でいくと、まず、地域全体としての集客機能を強化していかないと、なかなか相乗効果がない。商店街のことはまた別のところでも話しますが、地元商店街がやっぱりもうちょっと元気になってもらわないと困るんですね。そうするためにはやっぱりちゃんとエリアマネジメントをして、イメージ戦略を組んでいかなあかんと思うんです。

日本の商店街の中でもいくつか元気に再生しているところあるんですけども、例えば、この動物園前1番街とか、2番街、この辺の商店街とかも、実はすごくいい味出してるんですね。すごくいい味を出しています。今の通天閣が何で成功しているかという、昭和

もどきと言うたら怒られますけれども、昭和リバイバルみたいなのがあって、それで売り出しているところにあるんですね。ご案内のように、向こうに行くと昭和を新しく作っていますね。古く見せて新しく作っているけど、こちらのほうはほんまにリアルな昭和の商店街が残ってて、じゃりん子チエの世界がまだ何となく生きているという感じで、それを利用せえへん手はないんですね。

日本各地にも、やっぱりそういう周回遅れで先頭に立ったような、優位性を持った商店街というのが再生しているところ、いっぱいあるんで、あいりん地区の場合はそれがかなり可能やし、これには勝算あるんです。個人的には。

それと、もう一つ、これも、さっきの立地誘導と同じなんですけれども、簡宿の再生と同じで商店街の中でもやっぱり立地誘導していくべきで、空き店舗への特定業種の立地誘導が大切になります。例えば動物園前1番街の商店街の中を想定すると、10店舗でいいんで、何かあいてるところを確保して、そこに何でもええから、入ってとというと、変な店が入ってくるかもわからないですけど、こちらのほうである程度、業種を決めていって、例えば、外国人向けにちゃんと健全にやってくれるバーであるとか、ブッキングオフィスとか、両替屋さんとか、着地型のツアーやってくれるオフィスなんか、こういう業種を何となく想定しといて、公的機関がうまいこと賃貸契約に介在して、保証して、不動産を動かしやすくします。象徴的に10店舗、100万円補助くらいで、これで1,000万円くらいなんです。これを若者の例えば就労支援と絡めて、10店舗くらいいいのが集まると、その点を線につなげていって、面にしていく。だから、この図でいうと、当然、コアになる部分はこの面的なところなんですけれども、それをサポートする線が要るわけですね。そのサポートする線という位置づけで、商店街の整備にもぜひ乗り出してほしいなと思います。ハード面の整備というよりも、商店街の変容を促す助成ですね。

続けて、山王1丁目、2丁目の話なんですけれども、ここはもうエコミュージアム化していくというのが、私はええんちゃうかなと思います。立地条件から見ると、宿泊拠点と隣接しているという点が魅力的です。外国人が日に300人、400人おって、日本人の観光客もその4倍くらいいるような地区と隣接しているんで、ふらっと散歩に行くのにはええところなんです。そうしたまち歩きの収益がうまいこと地元還元されるようなシステムができるのが理想ですね。山王に今、福寿荘というところがあって、そこに若いアーティストなんかが入ってるプロジェクトがあります。長屋の集合住宅をうまいこと使っている。藤子不二雄さんらのおったトキワ荘の現代版みたいなのをつくろうみたいな話があ

るんですね。その他には、例えば、長屋空間を耐震防災モデル地区に改善するみたいな、長屋の空間を残しながらも、中をがちがちにガンダムみたいに变更后に、それを長屋空間の防災モデルとしてみんなで見に行くみたいななんもありかと思います。山王では生活空間をめぐるようなツアーが成り立ったらええなあという感じなんですね。これには当然、住民の理解が要るわけですがけれども、ちゃんと、収益を地域に還元するシステムがあって、その地域の人間に迷惑かからんような、プログラムを組めば問題はないわけですね。

そういう形でやっていくと、地域的にはあべの・天王寺からも山王や太子へお寄りてきます。新世界からも来訪者がふえ、宿泊施設が近いのでそこからも来る、そうした可能性があるかなということですね。

特に太子1丁目あたりに滞在している外国人に関して言いますと、本当、日本人の日常生活を見たがりあります。特徴としては、長期滞在しているんで、大阪城とか、ミナミとか、ベタな観光地へ行くと1日、2日で飽きるんです。そこからもう一歩踏み込んで、日本人はいったい何を食うてんのかなとか、どんなところに住んでんのかなとか、そういうことに関心が向かいます。そのような感じからすると、この地域の中で一番生活色が出ているのは、この山王地域なんです。この山王地域で、日本人の生活風景みたいなのが見られたらいいんじゃないかなというのは、観光学を学ぶ人間からの提案です。

そのほかにすぐできそうなことなんですけども、例えば、簡宿でも横のつながりが余りないことがあるんで、先進的なゲストハウスの見学会とか、勉強会とかをすればいいと思います。あと、サバイバル外国語をスタッフがしゃべられへんかったら困るということから、それを学ぶ機会を設けるのもありで、フロントで使う指さしマニュアルなんかもあれば便利だと思います。簡宿からゲストハウスへの転換を促すという意味では、それをアドバイスする経営改善コンサルタントがいてもいいでしょう。ただし、逆に、コンサルタントが教えてもらわなあかんかもわかりませんが。あと、楽天その他の宿泊予約サイトで集客する方法、この辺もなかなかノウハウを知らない簡宿があるので、それを指導する人がおってもええかなと。もう一つ、これは私のところの学生が考えたことなんですけど、観光系の大学やとか、専門学校が大阪にたくさんあります。お隣にいらっしゃる山田さんところのゲストハウスなんかでは、フロントスタッフとしてインターンシップを受け入れられています。そうしたインターンシップを大量に受け入れておいて、大量といってもたいたことではない、二、三十人でいいんですけども、それをちゃんと鍛えてもろといて、外国語対応できるフロントスタッフを育成しておくんです。それを人材バンクみたいにし

て、外国人があふれる夏場や春先に限定して有償で派遣するというのもいい考えだと思います。普段ならば、すでに外国人対応しているゲストハウスで大体収容できるんですけども、ハイシーズンになるとそこから漏れ落ちてくるわけです。東日本大震災の後もそうでした。東日本大震災の後も、関東から外国人がどっと来て、いわゆる外国人対応しているところがあふれて受け入れられなくなって、萩之茶屋1丁目や2丁目のホテルまで外国人で埋まった時期がありました。そういうハイシーズンのときだけでも、外国人も受け入れてみようかなという簡宿に有償ボランティアで派遣する。簡単に言うたら、アルバイト派遣ですね。そうすることで、簡宿からゲストハウスへと変わるような、何かきっかけづくりになるのかなということですね。

あともう一つ、小さな仕事づくりでいうと、就労困難者や生活保護受給者の雇用創出でいうと、要は客室の掃除ですね。これは、かつて、いろんな動きがあったみたいなんですけど、私は、変に職業訓練だけするんやなくて、良質な客室清掃の請負会社を指定して、そこへもう弟子入りしてもらい試用してもらおう。それで、その仕事に向くのか、向かへんか、試用期間を持って、向いていてうまいこといけそうならば正規採用という、職業訓練のための職業訓練やなくて、アルバイトで雇って、そこから正規社員に持っていくみたいな、そんなやり方のほうが効果的やと思います。客室の清掃っていうのは、プロの仕事なんです。やっぱり、ちゃんと努力されている方々がやっぺらっぺらでいらっしやるんで、なかなかそんな簡単にこなせるものやありません。逆にいうと、何人かを職業訓練をかねてバイトで試用して、そこからちゃんとできそうな人を採用していくみたいなほうがええんかなと思います。

それと、潮流づくりで早急に着手していかなあかんのは、先ほど言いました大阪国際ゲストハウス地域創出委員会、OIGの拡大版をつくることやと思います。OIGの拡大版をつくって、そこを中心として、「外国客対応の見える化」というのを進めて行かなあかんと思います。これは西成特区というよりも、太子1丁目、もしくはその周辺を巻き込んでの一種の市民運動になるかと思っています。拡大版OIGというのは何かというと、OIGというのはもともと、簡易宿所の経営者を中心に結成されたもんなんです。つまり、ゲストハウス地域を創出しようという組織です。この組織は、国際ゲストハウスをつくるのが目的ではなくて、それが存在して活かせる地域をつくろうというものです。だから、外国人客を受け入れるという意味を持ったところに、もっと手を挙げてもらって、OIGのシーンをペタペタと張っていくということですね。例えば、料理屋さんですね。レストランな

んかで外国人受け入れますよというところは、O I Gのシールを張る。そこに行くと、頑張るとにかく、どの国の人に来て対応してもらおうということですね。それと、今、決定的に欠けているのが、鉄道運輸事業者が、この辺のまちづくりに関わってくれてないということですね。そこが非常に大きな問題で、J Rの新今宮駅の、構内の表示を改善してくださいと何遍も申し入れても、長い間、全然動いてくれなかった。ぜひ鉄道運輸事業者もこっちに引っ張り込んできて、大きなところで話せなあかなという気がしています。

それと、これは多分浪速区のほうでも言われていると思うんですけども、関空から新今宮までの深夜の足がないのも課題のひとつです。L C Cは、大体、夜の遅くに着くんですね。遅く着いて、例えば深夜12時くらいに関空につくと、どこへ行ったらええのという話になるんですね。せめて、市街地まで、最後、最終便で、夜中の1時、2時くらいに、ぼつんと1本だけでも走らせてくれたらいいんです。新今宮界隈のゲストハウスでも、よくそういう問い合わせがあるみたいですね。深夜に宿直が起こされて、関空から外国人が「どうしたらいいの」と聞いてくるようです。そんなニーズに対しては、やっぱり鉄道運輸事業者の協力ができないということなんです。

それともうひとつ、羽田空港でもう先にやられてしもたんですけども、西成で前々からやろうと思っていたことがあります。対応可能言語シールを張ることです。羽田空港ではこの言語でなら対応できますというシールなんですけれども、西成では「対応する勇気があります」でええと思うんです。日本語でしゃべりかけられようが、英語でしゃべりかけられようが、フランス語でしゃべりかけられようが、とにかく頑張って答えますという、何かそんなシールをみんな張っとくとええんちゃうかなと思います。これは実は切実な問題で、個人の旅行者が、例えば、私たちの案内所にやって来られれば、それは当然安心して来られるんです。ところが、案内所の前で、地図を持って迷っているような人に声をかけると、とても警戒されるんですね。当たり前です。皆さんも海外旅行へ行ったとき、全く知らない人から声をかけられると、いい思い出があんまりないと思うんですね。変なもの売りつけられたり、ずっとつきまとわれたり。それでいうと、旅行者の方が自分で人を見つけて声をかけるというのが、実はすごく大事なんです。J Rなんかは、早くこうした制度を整備せいと私は言うんですけど、電車の運転手や車掌に旅行者が声をかけるのは本来だめなんです。ところが誰に声をかけていいのかわからない、だから目に付いた人に声をかけてしまう。だけど、声をかけられてもいい人が声かけてもいいですよとシールを張っとけば、それ探して声をかけるはずなんです。でも、それを張ってないもんやから、運転手

とか車掌とか、声をかけたらあかん人に声をかけて、電車がおくれるんですわ。ちゃんと見える化しておけばええんですよね。

当然、鉄道事業者やホテル事業者も、あと商店もそやと思うんですけども、外国人対応の「やる気ありませ」というものを張っておく。それ、まちぐるみでやると絶対話題になりますよ。後で水内先生に補足していただきたいと思いますが、阪堺線、チンチン電車の観光資源化というのも大事です。それと、今年にも実現しそうなイベントということで、最近、ありむらさんと一緒に動かそうか言うてるんですけども、新世界・西成エンターテインメントの発信というのを考えています。にぎわいづくりでいうと、この座談会ではアートということが言われていますが、アートは訳すと「芸術」なんですね。私が考えているのは既存のエンターテインメントでどちらかというと、「芸能」のほうですね。一方的に演者側が発信するんやなくて、観客に楽しんでもらおう、一緒に楽しもうというスタンスのやつですね。これが日常的に楽しめるのは、新世界と西成やと私は常々思っています。こんなまち、ほんまにないです。最近私もわかってきたんですけど、新世界から西成にかけては本当にエンターテインメントのワンダーランドですね。大衆演劇の小屋は新世界に2座あり、西成には3座。これはいわゆる地方の温泉の宴会場でやっているような大衆演劇やなしに、どれもちゃんとした芝居小屋です。5つとも。こんなところないです。ちなみに、大衆演劇の小屋は大阪が一番多くて、13軒あるんですけども、そのうちの5つが、実はこの地域に集まっている。すごいですね。それと、動楽亭、桂ざこば師匠がやっていらっしゃる動楽亭も、頑張って毎月1日から20日まで昼席をやっていらっしゃいます。通天閣の真下の通天閣劇場は、土日と月曜日にやっていらっしゃいますね。面白い映画館も幾つかあって、ほかでは見られないような懐かしい映画を見られるところあります。あと紙芝居の間屋さんが天下茶屋でしたっけ、ありますね。紙芝居もありますし、チンドン屋さんはあの林さんのところ、チンドン通信というのがあり、よく新世界から西成にかけてのイベントで宣伝をしてはります。

それと、最近特に注目しているのが西成ジャズ。西成ジャズは非常に頑張ってらして、水曜日は難波屋、日曜日は成田屋、と定期的にライブをやっていらっしゃいます。こういうライブが観れる小さなお店が、すごくふえてきているんです。だから、日常的に大衆演劇も見られるし、ライブも聞けるしという、とても貴重で珍しい場所なんですね。これをうまいことコラボレーションなんかするとおもしろいなと思っています。大阪集客プラン事業というのがあって、その募集がもうすぐ始まるんで、私たちが実行委員会をつくって、

ジャズフェスティバルでもいいですし、エンターテインメントフェスティバルでもやれば、絶対におもしろいと思うんですよ。ね、ありむらさんやりましょうよ。例えば、西成ジャズを大衆演劇の小屋でやってもらったり、大フィルにジャズをやってもらったり、ジャズがクラシックの曲をやるとか、何かそんなコラボレーションもありかなということで、とにかく、もう早急に動き始めています。

私のつとめる阪南大学のほうでも、学生の有志を募って西成応援隊というのをつくりにかかって、学生ボランティアで西成を盛り上げようということをやっています。あと、N I S H I N A R I 飲み歩きMAPというのが何かというと、「新世界・西成 食べ歩きMAP」をつくって、思ったんですけど、飲み歩きマップがあればいいなって思っています。実は食べ歩きMAPをつくって、一番反響あったのが、居酒屋さんなんです。飲み屋さん、西成の居酒屋さんは入りにくいところが多くて、東京から出張で来られた方なんかは、大阪商工会議所と組んで作成したものやから、まあ、間違いないやろということで行かれるようです。一番反響があったのが、実は立ち飲み屋さんやったということで、飲み歩きマップも要るなあと思っています。実のところはマップをつくれれば簡単に人が来るようなものではなくて、ほんまはやっぱり飲み歩きツアーのようなものを造成するのが一番いいんですね。みんなで一緒に行って、最初の1回目くらいは連れて行ってもらいましょう。最近はやりのバルってそういう発想なんですけど、あんまりふだん行ったことない人が、警戒するのを、一歩目を踏み出さず。観光学の立場からいうと、そうしたツアーみたいなものを採算ベースでつくったらええんかなと考えています。

○鈴木座長 今日実はたっぷり9時まで時間がありますので、どっか1回タイミングで5分休憩か10分休憩をとろうと思っっています。それで、そういうことになると、7時半くらいに一遍休憩とろうと思っっているんですけども。

○松村委員 ほな、ターミナルの話へいく前に1回休憩ですか。休憩の前に簡宿組合の山田理事長のご意見を聞いておきましょう。

○山田理事長 すみません。簡宿組合の山田でございます。

今、先生のほうからいろいろとお話がありました。今我々が思っているのは、西成区にとって、観光というものはいろんな産業がある中でどなたにも迷惑かけない、例えば、スーパーができたら商店街が迷惑かかるとか、そういう意味で、観光というお客さんと呼んでくることによって迷惑をかけないで、まちを活性化する一番いい方法かなというような感じで、私自身、思っております。

人を呼んできて街を活性化することしか、私どもはできませんので、それに対して、一生懸命やりたいなと思って、この2000年から今2012年ですけれども、12年ほど頑張ってきました。今現在、先生もお話しされておりましたように、外国人の宿泊者数が10万人というような形です。大阪を訪れる外国人は年間150万人と言われておりますので、何人に1人がここに来られているかという、15人に1人がこの地を訪れているということになります。シェアとしては6%、7%というくらいの確率というような形で、かなり大きなシェアを持ったような形になってきております。

それに加えて、今、日本人の出張族の方、それから、観光の方、それから、若い女の子の方のイベントの見学の方、すなわち、大阪城ホールでエグザイルがあるとか、スマップがあるとか、いうたときに、来られるというような形で、約30万人ほど来られております。合計40万人というような形で太子地区、それから、萩之茶屋1丁目地区というような形で動いております。先生の話ではいずれ、80万というような数字が出ておりました。現状も40万というような数字が出ております。

その方が、1日に宿泊費含めて大体1万円くらい支出していただけたら、大体、40億円ですかね。そのくらいのお金が西成区に落ちてくるというような形になります。そのうちの4分の1は簡宿の宿泊費なんですけれども、あとは、どこかで食事をする、どこかで食べ物を食べる、どこかで買い物をするような形の出費がなされていると思います。それがどこでやられているのか、商店街であるならば、我々の近くの飛田本通り商店街とか、いろんな商店街であるならば、一番うれしい話なんですけど、そこを通り越して、新世界のほうへ今行っているのが現状でございます。何とか西成区内でというような話、それには商店街自身もやっぱり努力して変わらなければならない面があるだろうと、今までどおりの経営ではちょっと無理かなというような気もせんでもないんですけども、そのうちの3軒、5軒でも、そういうような対応をしていただけたら、優先的にそこを紹介する、先生の食べ歩きマップのように、そういうような紹介をする方法ができるんじゃないかなというような気がします。

それから、今までの簡宿が外国人対応のホテルにすぐ変わるかということ、そういう形ではなかなか変わらない。なぜなら、今まで労働者の皆さんを相手にしているところなんで、畳の部屋である。畳の部屋やったら、どないしたらええねんで、やっぱり洋室の部屋にしなければならない。便所にしても、和室の便所である。それはシャワートイレにしないかならない。ほんたら、お風呂はどないするねんいうたら、労働者向けの皆さんのお

風呂ですから、1カ所しかない。女の人用、男の人用の2つないわけで、そしたら時間を区切ってかえやなあかん、そんなことしてられへんなどというたら、24時間のシャワーをつけなければならない。いろんなことがハード面においても、それから、また、フロントが英語をしゃべらなあかんとかいうような形、ソフト面においても、もちろん、パソコンに堪能にならなきゃならない。いろんなハードルがあるんで、そう簡単に変わることができない。ですけれども、それなりに努力をしてきた10軒、今のO I Gに参加しているところは、そういうような対応でだんだんと変わってきているということかと思います。

それから、今、滞在型の外国人だという、滞在型とはなんやねん、というような話になりますと、たとえば8月1日にP Lの花火がある、おもしろいから行っておいでという話をすると、その宿泊がそこまでのびるようなわけですね。

岸和田のだんじりがあるよ、ほんならそこまでちょっと我慢して延びよか、いや、東京行って、またこっち戻ってこうか、というような形が滞在型であり、いろんな長期にわたる原因かなというふうなふうに考えております。

いろんなことがあるんですけれども、我々が望むのは行政の皆さんとかいろんな方にお願ひするのは、外国人が日本に訪れるときに持ってくるのが、ロンリープラネットという本なんですね。必ず、ロンリープラネットという本を持ってくる。日本人がいうと、地球の歩き方というような形になるわけですが、その本を持ってこられる。その本の中に西成の新今宮地区というのを載せていただけたらもう、これはもう、それで、それだけで世界に発信できるということなんです。その1行でも2行でも載れば、もうそれで、西成区の新今宮地区というのが、もうこれで確保されて、皆そこへ寄ってくるわけです。

だから、そういう形が機能すれば、一番いいかなというふうなふうに思っております。

とりとめのない話ですけれども、ざっと今、松村先生がおっしゃられた話のちょっと、足りない部分という、私が感じている部分をお話しさせていただきました。

○鈴木座長 どうもありがとうございました。

感激いたしました。もう、これだけ具体的で問題も課題もはっきりしていて、やることもはっきりしていて、何で動かないんだろうというぐらい非常に明快だと思います。

それで、まず、ここからいろいろと何を西成特区として、していくべきかということについて、議論をしたいんですが、30分くらい、これで議論をとりたいと思います。その後、休憩をしまして、新今宮のターミナルの話ですとか、それから、屋台村の話なんかを後半にやろうと思って、30分くらい議論をしたいと思います。どなたからでも構いませ

んけれども、意見とか、コメントとかありましたら、お願いいたします。

私からちょっとよろしいですか。私、個人の意見としては、ここは規制緩和ももちろん重要なんですけど、お金をがんとつけても、私はいいんじゃないかと思うんですね。中国で言ったら、沿海部みたいな話で、何ていうか、もちろん、内陸部と沿岸部とあって、あいらんでも、南北問題みたいなありますけれども、どこか、どんどん、ぐいぐい引っ張って行って、集客して、景気よくしていけば、どんどんこれについていきますので、規制緩和とある程度、費用対効果というのをちゃんと計算して、見合うものであったら、投資をするというような、行政も投資を支援するというようなことがあっていいんじゃないかというふうに私は思うんです。

それで、まず、1つ、先ほどいろいろお話あって、いろいろ疑問があるんですけども、まず、立ち枯れていく、つまり、この地域の歩いてみるとわかるんですけど、すごく、先進的で取り組んでいっしやるO I Gのものもあれば、本当に立ち枯れて、それで、立ち枯れているところが、本当に隣にあたりするので、それが何についてこないのかなというふうに思っていたんですけども、これはやっぱり簡宿の規制というのが大きな問題という、さっきちょっとお話があったんですけども、それというのは具体的に、三、四十年前に戻すというところも、もう少し具体的なお話いただきたいと思って、どういう規制がどう災いしているのかというようなところを、ちょっとお話いただいでよろしいでしょうか。

○松村委員 これは非常に難しい問題なんですけれども、簡宿営業というのは、基本的に旅館業法というのが基本になっていて、要は宿泊部分を共用するというのが、基本的な定義なんです。それで簡宿免許というのがおりています。ホテル営業の場合は、また別にホテル営業の規制があるんです。ところが事実上、宿泊部分を共用しているような簡宿は、現在のあいらんには、もう存在しないんですね。いわゆるたこ部屋で、8人部屋、9人部屋と押し込んでいる簡宿というのは、生活保護の収容保護施設くらいで、実際このまちはもうありません。

ところが、現存する簡宿は当然のながら簡宿免許で営業されている訳です。そうした法律の定義上簡宿でない簡宿が次に、例えば、何かの形で建物に手を入れたり変えようとする、もう簡宿免許はおりないわけです。だから、基本的にはホテル営業に変えないとダメなんです。ところが、ホテル営業となると、今度、また、ホテル営業のほうの規制があって、それは現存する簡宿の実態とは合致していません。結局のところ、ホテル営業に変

えようとする、多額の投資や労力が必要となるため、そんな力のないところが、もう立ち枯れざるを得ないような状況になってしまうんです。

○山田理事長 具体的に言わせていただきますと、今、簡宿免許をおろすに当たって、100部屋あるならば、半分の50は必ず相部屋にせよ、すなわち2人以上の部屋にしなければならないというような規制があります。

今までは1室でもよかったですけれども、5年ほど前からそういうような形になりました。そうしますと、2人というのは、最低の人数で行政が考えているのは、5人、6人というような形の部屋を想定しているような簡宿というような形になっております。

それが嫌ならというよりも、それが無理なら、ホテル営業にきなさいよと、ホテル営業にすると、今まで4.9平米でよかったのが、7.4平米以上とか、そういうような形で部屋の大きさも変わってくるというような形で、それなりの採算を合わすには、若干難しくなってくるのかなというような形です。だから今おっしゃられたように、簡宿として建てかわることはちょっと難しいというようなところが具体的なところでございます。

○松村委員 補足しますと、現在の大阪市の簡宿に関する条例では、要は、部屋数の半分は多人数の共用でないとだめということなんですね。だから、100部屋あると50部屋は大部屋にしてくださいということなんですね。この規制は、五、六年前に市の条例が改変されて、そうした条項がどんと入ってきました。恐らく、西区のほうでラブホテル規制の問題があって、ラブホテル規制を強化するとき、そのとぼっちりを食らって簡宿のほうも変えられたと私は認識しています。この延長で何がおこったのかというと、東京のほうでゲストハウスを運営されている方があいりんに視察に来られて、私が案内しました。実はその方々はあいりんの中でゲストハウスを運営したがってあったんです。ところが、現在の条例の基準でいうと、100室のうち50室は相部屋にせなあかんですが、あいりん地域の既存の簡宿のほとんどは、狭いながらも個室になっているので、個室と相部屋比べると圧倒的に個室のほうが便利なので、新たに参入して相部屋ばかりの簡宿をつくっても競争力がないやろうと判断され、結局、断念しはりました。今さら、そんな先祖返りしたみたいな、相部屋の多い簡宿をつくっても、この地域では客は入らへんし、値段をどこまで下げなあかんのかというような話になるんで、結局のところあいりんへ進出するのをやめて、京都に新しく簡宿を開業しはりました。つまり、あいりんは新たな投資のチャンスを条例の規制で逃しているんです。その規制で。これが現実です。

だから、やっぱりその辺は大きな問題やと思いますね。

○鈴木座長 ありがとうございます。そうすると、あんまり、実は国とか、大きい話でなくて、市の条例の改正の話なんですか。それなら何か出口があるかもしれないですね。府でもなくて市なんですね。ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○委員 今の点でちょっと確認なんですけど、それは要するに旅館業法とか、条例の扱いの話であって、建築基準法とか、消防の問題ではないということでしょうか。何十年前に戻すといいという話が、防火対策、火災のときの対策まで戻せみたいな話だったら、例えば、いっぱい焼け死んでいいのか、そんな責任持てるのかということになってしまうんで。建築基準法の既存不適格とかはよくありますけども、それを簡単に規制緩和するという話だと、やっぱり責任持てないなと思うんですけど、どうなんでしょうか。

○山田理事長 それはもう当然のことで、マル適対応のホテルでないそれは無理だと思います。現実には簡宿は昭和60年くらいから新しく、古くは昭和53年から始まりましてけれども、建てかわったのが昭和60年くらいからですけども、すべてマル適をとっております。現在、消防のほうでマル適というのは余り推奨しておりませんが、また、消防署のほうも、適マークを交付するというので、ほとんどもう完璧に適マークをとれる状態ですので、持っている状態ですので、その辺はもちろん、法令遵守して、その上での話になるかと思えます。

○委員 もう1点お願いします。そのハード、ソフトの改善の助成ということを、松村委員がおっしゃったんですけども、コンサルティングとか、全体としての取り組みに助成するというのは当然ありだと思うんです。商店街とか、エリアの改善とか、それぞれの経営改善のためのアドバイスというような意味では。ただ、何か個別の宿泊施設等にまで、特にハード面の助成というふうなことをやると、ちょっと抵抗があるんじゃないかなと思う。1つは資本蓄積した分でできないのかということがありますし、今はいろいろ市民生活面の予算を削っている中で、ちょっとどうなのかなということなんです。

○山田理事長 松村先生はいろんな事例を考えて、それをあいろん地区にも当てはめようと考えられているかと思えます。例えば、東京の台東区の例をここの地域に当てはめる。台東区はそのような簡宿から、要するに、観光客を呼び込むとか、簡宿からアパートへかわるとか、いろんな助成を現実には何年も前からしております。それを頭に、念頭に置いておっしゃられているのかと思えますけれども、簡宿としては、余りそういうことは考えておらないで、それよりも、どないかして、行政のほうでここを、西成を世界の西成いうん

ですか、タイのカオサンのように、ここに外国人が集まっているんだと、安いホテルがあるんだとかいうような発信をしていただきたい。もう、それに尽きます。そういうことを宣伝していく部分にお金をかけていただきたい。それによって、内外、日本はもちろん、世界に向けて発信をしていただくのに、原資をつぎ込んでいただいたら、こっちがお客さん来ていただいたら、我々だけではなしに、商店街も潤うし、まち全体も活性化してくる、こういうふうを考えております。

○松村委員 台東区の簡宿に対する助成は、台東区の担当者さんに聞くと、立ち枯れるよりはいいでしょうと、立ち枯れて、そのまま、もうどないしようもなくなるよりは、変革を促すという意味で、助成をつけてますということをおっしゃっていました。このままやったらもうどないしようもないのがわかっているんで、変わってくださいという、そのための助成という位置付けでした。実はここには上限100万円とか書いてますけど、こんなん1万円でもええんですよ。要はこっち側へ変われという方向性を示すだけでいいんですよ。お金の問題では必ずしもないと私は思うんです。要はこのままやったらあかんでしょう。かわるならこっちですよ。こっちの方向へ動くんやったら、奨励しますよという発想です。

○鈴木座長 よく投資を呼び込む呼び水というのはありますけどね。政策投資銀行が貸し出すと、ほかの銀行も貸し出すという話ありますけれども、何か大きな方針で行政がこの方向でコーディネートしますと、その方向で何かころころ変わらずにいけますという姿勢を見せるための助成金というくらいのもんという感じなんですかね。

ちなみに、台東区はどんくらい出しているんですか。ご存じですか。

○松村委員 30万円でしたか、何かそんなもんでした。

○山田理事長 そんなもんですね。

○松村委員 要はトイレを改善するとか、風呂場の改善とか、そんなんです。

○山田理事長 最高で2,000万円までいけますね。

○松村委員 ああ、そうですか。ちょっと、私もその辺の具体的な数字は忘れましたが、ともかく変革を促すための助成ということです。

○鈴木座長 後は、ゾーニングの中で転換というか、だから、外でもやりたい人はこっち来られるし、ちょっとやる気ない人はもう、ほかのところに、あるいは、貸し出すというような当然、だから、ゾーニングのための補助金というのは、多分、ガイド性というか、非常にガイド効果が大きいので、それは行政としても多分あり得るんじゃないかと思いま

す。

○松村委員 それとあと、立地誘導ですね。立地誘導せなだめですね。やっぱり、いろんなものが入ってきて、入ってくるのはええんですけども、全く関係のないものが入ってきて、パッチワークみたいになってくると、やっぱり、ある意味やりにくい。この地域をどう育てて行くかというある程度の方向性というのがあって、それに親和性の高い業種が入ってくるような、何かそういうシステムを組んで行くべきやと思います。地域の全部が全部そうすることないんですけども、本当に、ごく一部のそういうゾーニングしたところに限って、そっちの方向性に向けて、動いてくださいよという助成のあり方はいいと思うんですよね。

いや、子育ての話でもそうでしょ。要はそういう世代が来てほしいから、それに向けてまちづくりをして、いろんなものをつけていきたいと思いますという話でしょう。ならば、この地域は外国人、もしくは国内からの観光客が過ごしやすいような、滞在しやすいようなまちにしたいので、それに適合する業種やったら何か歓迎しますよという、その姿勢を何かの形で見せるためのゾーニングやと思うんですね。

○鈴木座長 都市経済なんかだと、ゾーニングする大きな意味は地価を上げるんですよね。ゾーニングしてしまっただけで、目的を決めてしまうと、そのエリアの地価が上がって、それで、それを担保にして融資をして、投資を呼び込むということもできますし、売って、自分がこのゾーニングの目的に合わないと思ったら、売って外に出てくるということも推進されるので、だから、何かそういう価値を上げるためのゾーニングというのは考え、寺川さん、先生のほうがずっと専門ですよね。

○委員 かなりわくわくする、案が、今回出てきているので、その辺は楽しみなんですけれども、実はまちの中でも、この地域の観光化の話はいわゆる魅力を上げるという意味でいうと、かなりいろんな議論をされているんですね。

山田さんも言うところなんですけれども。その一方で、例えば、この大阪国際ゲストハウス地域としてイメージされているエリアと西側の萩之茶屋エリアのつながりをどうイメージ化するかというのが、実はまだ整理できていないところではないかと感じています。つまり、東側が国際化ということで、いろんな広がりを持って地域全体を牽引していくようなイメージなのか、東側が国際化ゾーンとして成り立っていくような、そういうまちをつくっていくのかどちらのイメージをお持ちですか。また、簡宿は実はどちらにもあるので、そこの活用のあり方というのは、どちらをとっても重要なことなのかなと

いうふうに感じました。

○委員 関連していいますと、再生フォーラムでは2000年のワークショップで、簡宿のターゲットをバックパッカーに変えていく案が出てきたんです。同時に、生活支援付きの福祉マンション、今日サポータティブハウスと呼ぶものにしていくという案が出てきたんです。そのときから懸念し続けていたのは西側のエリアとの関係ですよ。つまり、日雇い労働者とか、単身の高齢者、生活保護の人たちを排除するような形にこれが進んでいってはいけません。両方ともすばらしい案なんだけど、そのことに対する懸念といいますか、それが起きないかをじっと見つめている目みたいなものも地域にはあるわけですよ。そのことに対しては、ずっとこれを進めている人たちは配慮し続けてきたということを私は事実認識として持っています。

例えば、順番としてサポータティブハウスとか、生活支援付きのアパート化の構想のほうが進んでいっているんですよ。だからもし、この国際ゲストハウス・プロジェクトのほうが進んでいくと、これは弱者を排除していく流れだというふうに警戒されますから、そういうことになりかねないですから。だから、サポータティブハウスのオーナーさんたちが一生懸命そこに住んでいる人たちが住み続けられるようにするための仕組みづくり、住居の確保というか、そういうのを一生懸命やってきたという実際の流れがあって、次いで、ゼロゼロ年代の中盤あたりから、この国際ゲストハウスの具体化がぐっと進んできたという経過があります。地域の人たちは、少なくともそれを見てきた人たちは、その順番で見ているので、それ自体、我々が当初懸念していたことに対する心配は、さほどないと思います。それと、今日、松村先生の話聞いてて、それこそ簡宿はどこもむしろ空いて、放っとしても立ち枯れてしまうような状況で、部屋の数からしても、排除する余地は量的にはないということです、その点は1つ安心していいことかなと思っています。

ただ、その問題意識というのは街の中に常にあります。あいりんのまちづくりは社会的包摂を、スローガンの一つにしているわけですから、逆にいえば、それをもクリアしながらできていった国際ゲストハウス地域として、これが盛り上がれば、成功すれば、それこそ西成モデルということになって、多分ほかの外国の例はその辺はどうしたのか、排除になったのかわからないですけど、非常に優れたモデルにしていければいいなと思っています。

それから、もう一つは、それと同時に、こういうプロジェクトが実は地域の日雇い労働者にとって雇用を生み出す場にならないかということも一貫して持ち続けてきた問題意識

です。そして、出てきたのが、そこでのベッドメイキング仕事で、一時期、ゼロゼロ年代前半に西成労働福祉センターと簡宿組合が一度構想を組んだんですよ。経過だけいいますと、労働福祉センターの側が提案しておきながら、実はつぶしたというのがありまして、非常に私なんかはそれを苦々しい思いで見てたんですけれども。その仕事はどういうイメージかといいますと、モデルがありまして、東大阪市環境事業局の、家庭の生ごみを収集する仕事があるんです。いわゆるパッカー車に乗って。その助手の仕事っていうのは、よく人手が足りなくなるんですよ。それで、足りなくなったときに、西成労働福祉センターに緩やかに登録しているというか、プールされている、何人くらいかな、四、五十人の中から、「何人足りないから明日来て」、「誰だれさん、あした手伝ってほしい」と、声がかかるわけですね。センターの窓口への電話連絡で。それに応じて、その仕事に行くというような。建設系ではない比較的高齢者でもできる仕事なので、あるいは今の若者のように、流入してきたけれども、建設の経験がないというような人でも対応できる仕事なので、非常にいいモデルなんです。これはそれと同じように、ある種の登録制度にしておいて、技能講習もかませて、簡宿のベッドメイキングに欠員が出たときに、そこを急遽手伝いにいくような形でまず入って行って、もちろん、それでよくできる人はそのままレギュラーになっていくのが一番いいわけなんですけれども。そういうスタイルでできないだろうかという構想が山田理事長さんから提案され、それはいいことだと、進めていった経過があるんですよ。

だから、山田理事長さんも今はその苦々しい経験にもかかわらず、本当に西成労働福祉センターとか大阪府がそれをやる気があるのであれば、受け入れましょうという気持ちはまだおありなんじゃないかと、私はひそかにまた期待を持っているんです。ただ、今日の松村先生の話の聞いてると、この仕事はプロの技が必要で、そういう人員補完的なやり方でやっていくようなものではないと。むしろ逆に、いろいろな人が現場で実地研修しながらやってみて、それに耐えられる人が選ばれて定着していくやり方のほうがいいんじゃないかとおっしゃってましたよね。確かに、そういうことだろうと思います。そんなに甘くはない世界だろうと、ただ、そういう新しいやり方にこしらえ直してでも、こういうように地元での仕事づくりのしくみから出てくる雇用というのを何とかして作り出していけないもんだらうかという非常に強い希望は持っております。

○松村委員 1つ大事なことは、このキャパを見てほしいんです。今、労働者の年間の宿泊は、70万から100万泊って読んでいますけれども、これで外国人と日本人客が大体

40万くらいですね。まだ余っているんですよ。倍になっても、まだ余裕。

あいりん地区で生き残った65軒の簡宿のうち、比較的元気なところと、しんどいところとあるんですけど、しんどいところがこれからも福祉マンションに転業していくんかっていう問題ですよ。生活保護を受け入れる方向へ持って行って、福祉住宅をどんどん増やしていくんか、それとも宿泊業として踏みとどまって、次の展開をねらうんかという、瀬戸際やと思うんですよ。

それともう一つ、外国人とか、国内観光客とかが増えると、炊き出しに並んでいるおっちゃんたちを見せもんにするんかみたいな話があるんですけども、そのためにもなおさらゾーニングが必要なんです。ちゃんとゾーニングせなあきません。別に観光客で来る人は炊き出しを見たくて来るわけやないんですよ。それはある意味で偶然のバッティングみたいなもので、通天閣に行きたいような人が道に迷って三角公園へ行きつくと、それは別に望んで行ったわけやないんです。三角公園に好んで行く観光客って、100人おって、1人おるかおらんかですよ。むしろ、本来はちゃんと、案内表示をして、ゾーニングをすれば、観光客とおっちゃんたちは共存できるんですよ。お互いに交流する場はあってもええと思うんですけども、別に労働者の中に観光客が積極的に踏み込む必要もないし、逆に、労働者の側は観光客の中に積極的に踏み込んでくる必要もないし、お互い、集合でいうと、Aの集合とBの集合の間の和でいけるところをつくっておけばええと私は思うんですよ。その意味でもゾーニングをちゃんとせなだめですよ。私らが観光インフォメーションセンターを運営するなかでも、それはやっぱり切実に感じますよ。

今、JR新今宮駅なんかは、構内の案内標示が比較的鈍臭いんで、修学旅行生がセンターの前へおりてくるわけです。センターの前へおりてきて、ずっと南へくだってしまうと、これは修学旅行生にとっては、ある意味で不幸なわけです。そうでしょう。見たくて行っているわけやないですから。通天閣へ行きたいんやけど、わからへんから道に迷ってそっち行ってるだけなんで、それはやっぱり避けるべきことで、うまいこと仕分けて、誘導していくべきやと私は思うんです。

それは地域として取り組んで行くべき課題やと思います

それと、あと、生き残った65軒の簡宿が、このまま立ち枯れていくんか、生保に向かっていくんか、いろんな新しい客を受け入れて再生していくんかという、やっぱり大きな転機やと思っています。

○山田理事長 簡宿組合は要するに労働者の皆さんの生きがいくつくりとか、仕事づくりと

かというような面は余り得意な分野ではないと思います。そういう面では、西成区にはいろいろなグループがたくさんあります。いろいろなグループは皆、それぞれいろんな目標を立てて頑張っていると思うんです。それはそれで非常に素晴らしいことだと思うんです。我々は何とかお客さんをこのまちに呼んできて、何とか西成、特にあいりん地区を変えていこうというスタンスでやっておりますので、それはそれで、いいのかなというような気がします。

それから、今の萩之茶屋と太子のすみ分けはどうなのかというようなお話がありましたけれども、今簡宿組合では萩之茶屋で簡宿をしている方でも、何とか、旅行サイトに登録して、お客さんを呼んでくるようにというような形で今、30ほどあるんですけれども、そのうち、5軒、今、登録しておりますけれども、それを10軒ももって行って、何とか、萩之茶屋1丁目も一般の方が散歩なり、そういうような、まちをうろうろするような形を想定し、また、前にも申しましたように、イベントのあるときは若い女の子もうろうろできるようなまちに、そういうことで、太子1丁目は現実には10年間に変わってきたわけですから、萩之茶屋1丁目もそういうような形で変わっていったらなという、簡宿としてはそういうふうな努力をしていくというような形でおります。

○松村委員 めっちゃ大きな夢を語ると、例えば萩之茶屋1丁目は混在していますよね、簡宿と福祉マンションが。萩之茶屋2丁目も混在していますよね。これを例えば銀座通り沿いに簡宿をうまく寄せてくるというような発想はないんですかね。こんなん中国やったらすぐやりますよ。

○委員 山田さん中心にみんながまとまっている。

○松村委員 例えば、萩之茶屋1丁目の大通り沿いで、福祉マンションをやっていらっしゃる。こちらは、大通りから少し奥まったところで、簡宿をやっていらっしゃる。そんなところどうしが、うまいこと、入れかわって、大通り沿いには簡宿を集めてくるみたいな。そうすると、大通り沿いには簡宿が、少し奥まったところには福祉マンションが集積して、するでしょう。

○委員 全体で開発という言い方がいいのかどうかかわからないんですけれども、そういう開発整備するエリアと改善型のまちづくりをするエリアをいうのを決めた上で、事業の可能性を追求し、一定の入れかえは不可能ではないと思います。しかし、権利者の問題がありますね。そこがクリアすれば可能性があるかもしれません。

○松村委員 それがもしうまいこといけば、共用できる部分というのができてきますよね。

まちの中で。

○委員 そういう意味でいうと、これからの議論だと思いますけれども、新今宮周辺の開発について、このエリアが大きく国際化に向けた事業が進むのであれば、そういうエリア設定の中でいろんな事業メニューは事業的に可能だと思います。

○松村委員 エリアを設定すると、それがきっかけとなって立地誘導されるというところ、ないですかね。とにかくゾーニングすることから始まるような気がします。

○委員 誘導するためには、どんなまちにするかということ。

○委員 共有化しないといけないということですね。

○委員 だから、そういう提案を出したらいいと思うんですよね。まちの人たちも、かなりいろんな思いとか、考え方持っておられるので、それがうまく整合すれば、本当に動くと思いますよ。ただ、今あるものをどう使うかということも、その前の段階で考えないといけないですね。

○委員 もうすぐ休憩になると思うので、松村さんの話は後半戦、ますますヒートアップするおもしろい話になっていくかと思うんですけれども、その前座でちょっと、今までの話をちょっと違う観点から位置づけますと、大阪市のまちというのは、つつい東京と比べることになると思うんですけれども、まちが、おもしろいまちがどこかという、都心の周辺部のいわゆるインターシティと我々は言うんですけれども、例えば環状線のあるエリアというのが、本来一番おもしろくなるはずなんですよ、本当いうと。東京でいうと、山の手線でまさしくそういうエリアにあって、そこに、それぞれのターミナルが上野から池袋から新宿から渋谷から品川からという形で東京というのは、その辺のおもしろさが都市の魅力をつくっているんですよね。

大体、200万人、300万人の規模の都市がいかにか人を引きつけるかという、そういう都心部のおもしろさと、この周りの周辺のターミナルのおもしろさというのが、まちに多角的に人をうまく引きつけてきたんやと思うんです。

ところが、大阪のまちの1つ、最大の欠点というのは、いわゆる大阪環状線沿いの駅がそういう役割を歴史的にあんまり果たしてこなかったというのが、ちょっと大阪市の空間的な魅力や広がりとして弱いところなんです。

ほとんど、やっぱり梅田となんばというところはかなり集中し過ぎてて、いわゆる御堂筋線沿いにかんりのものが集中していた。で、まちがおもしろくなっていくかという起爆剤はやっぱり京橋が元気になるとか、鶴橋が元気になるとか、あるいは、弁天町が元気に

なるかとか、その辺がちょっと、1つの鍵なんですね。今まであんまり大阪市というのはその辺をあんまり、意識してこなかったというか、まあ、そらあれですよ。しゃあないですよ。動物園前の駅という名前があって、隣に新今宮の駅があったり、阿部野橋という駅があったら、隣に天王寺という駅があったり、野田という駅も地下鉄は玉川ですよ。天満の駅も地下鉄は扇町という形で、どっちかいうたら、大阪市のほうが、いろんな骨格をつくってきたという自負があって、JR、国鉄さんに対しての、連携がとれてきてなかったんですよ。

その意味で、やっと今、大阪というのは、京橋が大きくなり、それから、鶴橋もいろんな意味で脚光を浴びてきて、多分、阿部野橋というのが一番今、脚光を浴びる場所になってきた、ようやく、環状線沿線がちょっと強くなってきて、で、大阪駅というのは65万人の集客を持っています。難波が40万人ですね。で、今、さっき言うた、天王寺が30万人、鶴橋は大分落ちたんですけども、それでも、25万くらいあります。それで、京橋が28万くらいあるんですね。新今宮どれくらいあるかご存じですか。乗降客。16万人くらいおるんですね。ただ、乗車客は1万切っているという、要するに、乗り降りだけするまちなんですけれども、やはり、この便利さというのが、今、この国際集客って、非常に脚光を浴びているんじゃないかなというふうに思います。

なので、1つ、次の話も多分、大きな話になってくると思うんですけども、ここはこの素晴らしい交通のネットワークの拠点を持ちながら、誰もこれをうまく利用していなかった中で、ある意味で、誰もというのは要するに労働者が利用、労働者も、JRの新今宮駅も南海の新今宮も40年ちょい前にはなかったですから、本当に新興の駅なんですよ、この駅というのは。そこに新しい流れをつくっていくというような形での大阪市の1つの大きな目玉として、この環状線沿いの駅を強くしていこうという形ですね。この中に新今宮がうまいこと乗っていくようにという提案を、動物園前の駅の名前を変えようというのは結構大変や思うんで、新今宮で、大阪市的には動物園前の駅の上だろうとかいうかもしれませんが、チン電も南霞町ですけど、駅の名前から全部ちがうというのは結構、しんどいところがあるんですけども、それも含めて大阪市の構造的に、最後に残されたいいわゆる交通至便であり、1つの都市のおもしろさを演出する格好の場であるので、そういう形で後半の議論というの、そういうところになっていくと思うんですけども、その形での大阪市全体の中での位置づけを意識したあり方というのをもう本当に、ここで花開かせたらいいんじゃないかなというふうに思います。

○鈴木座長 ありがとうございます。ちょうど、いいまとめをしていただきましたので、これで、1回休憩をとりたいと思うんですけれども、10分休憩しましょうか。では50分まで休憩いたしまして、それから、また後半にまいりたいと思います。ありがとうございます。

(休憩)

○鈴木座長 ご着席をください。よろしいでしょうか。

では、後半戦にまいりたいと思うんですけれども、さっき、ちょっといろいろご感想をいただいたりして、聞いておりましたけれども、ちょっと、補足説明が必要だと思いましたので、申し上げます。今日は、全体のいろんなこれから、あと、また8回くらいやるつもりでありますけれども、話では、多分突出して、明るい話というか、景気のいい話です。

けれども、決してこれで終わりということではありませんので、多分、こういう景気のいい話は、これくらいポジティブな話は今回くらいの話で、もちろん、いろんな問題を抱えている、例えばこういうことを考えると、じゃあ、ほかの簡宿はどうだろうかとか、福祉マンションはどうするのかとか、生保の人はこれだけいるのは、じゃどう考えるのかとか、その生保にもかかれずにシェルターにいらっしゃる方はどうするかという問題もこれきっちり議論します。

しかも、何回もかけて議論をちゃんといたしますので、その話を全部忘れてこんな景気のいい話だけしてるといふふうには、ぜひ受けとめないでいただきたいと思います。それはそれで、もうちゃんとやるんですが、今回はこの話に、いろんな話を一遍にやるわけにいかないの、まとめて話をしていると、こういう位置づけでございます。

それでは後半、新今宮のターミナル地域のお話と、それから、その屋台村構想ですね、この2つについて、ご発表いただきまして、その後、また、議論をしたいというふうに思います。よろしく申し上げます。

○松村委員 ありがとうございます。

この地域の観光振興というようなお話は、本当に、唯一、今日くらいしか、お話しさせていただくチャンスがなくて、この後はもう、萩之茶屋1丁目、2丁目、3丁目を中心とする厳しい話が続くと思いますので、その分、今日、私はしっかりとお話しさせていただきます。

ということで、次は新今宮ターミナル地域についてなんですけれども、大体、私が考えているターミナル地域というのは、この図で黄色の示した部分で、中心になる地域は1、

2、3、4と番号を振っています。この辺の4つのところ。1つは、JRの新今宮駅の北側にある市有地なんですけれども、何か学校移転の目的で大阪市が入手した土地がそのまま、かなり広大な土地としてあいています。これは絶対有効利用、活用すべきで、民間による事業誘致も視野に入れてやっていくべきだと思います。

もう一つはセンターの敷地の活用、これに関しては、今後もっと、深い議論があると思います。ただし、私の立場から言っておきたいのは、このセンターの場所に立地しなければ存在意義のないもの以外は、可能な限りよそへという発想はあってもいいのかなという気はします。何が何でもここでないと意味がない、存在意義がないやつは絶対ここに残すべきやけど、それ以外の、よそであってもいいもんはよそへ移してもいいという議論があって、できたら、そうすることで、多少でもスペースをあけられれば、特に、新今宮駅に近いところですね。そうすることで、スペースがあけば、有効活用できる可能性が出てきて、まちづくりの芽も出てくるなという気がしています。

あともう一つは、JR新今宮駅の南側の幹線道路沿いなんですけれども、こちらのほうは、新しくできた建物が多いところで、福祉マンションになっているところも多い地域なんです。もしターミナル構想が実現するならば、ターミナルの一等地に福祉マンションがずらっと並んでいるというのは、何か、違和感があるんで、特区の枠で福祉マンションから商業施設付きのゲストハウスへ転換できるような施策なんかも視野に入れて、こっちもちょっと立地誘導が必要なんかなという思いがあります。

もう一つ、気になっているのが、これはもう大阪市の最大の懸念なんですけれども、フェスティバルゲートの跡地です。これはもうマルハンさんが、落札されて、購入されています。今日も、その跡地を見てきたんですけれども、大阪市営地下鉄の動物園前駅の出口がもうでき上がっています。けども、その奥のほうを見ると、まだ瓦礫が山積みの状態で、計画によると2013年6月にツーテン・ゲートをオープンされる予定です。今から1年間弱でツーテン・ゲートを建てて、ボーリング場とカラオケのある複合娯楽施設をつくるらしいです。ただし、このターミナル計画が動き始めると、「ちょっと、待ってよ」というのもありなんかなという気がしています。ただし、この件に関しては、相手は民間でもう私有地になっているんで、何も言えないんですけれども、ターミナル構想と連携して欲しいな、そういう思いはあります。そのまま本当にツーテン・ゲート建てるの、という思いはあります。

それで、私案を述べさせていただきたいと思います。1つは南海・阪堺・JR西日本と

大阪市交通局などの鉄道事業者、このほかマルハンや、地権者という言い方がいいかわかりませんが、地権者や地域住民の代表とかも入れて、ターミナルづくりの協議会みたいなものを設けて、そこでどうしたらええのかということを実際に議論し始めなあかんと思います。ターミナル構想をほんまに動かせる組織づくりが必要で、多分、大阪市がお金を投じるといっても、そんなにたくさんの投資は期待できないでしょうから、やっぱり民間の資本入れ、ちゃんと商業的にも成り立って、採算もとれるもんをつくっていかうという枠組みが要ると思います。これはまさに、グランドデザイン大阪で考えているビジネス・インフラ・ディストリクト、B I Dやと思うんですけども、それをこのターミナル構想でも立ち上げて、話を進めていかなあかんという気がしています。

私個人の意見を述べます。図の1番のところ、JR新今宮駅の北側のヤードなんですけれども、梅北ヤードやなくて、新今宮北ヤードでええかと思うんですけど、新今宮北ヤードを活用するならば、私は長距離バスターミナルがええなと思います。大阪市は市営交通なんで、長距離バスという発想は実は持ってないんですね。基本的に市バスは、郊外に出るやつはない。ということで、幾つか、電鉄会社なんかは長距離バスを運営していらっしゃるんですけども、この長距離バスターミナルの1階部分を台北の士林夜市みたいに、フードコート型の屋台街にしたらいかがでしょうか。実は今度公募で決まった浪速区の新区長さんは、浪速区でナイトマーケットをやりたいと言うてはるんですね。それやったら、ぜひ一緒にやりましょうよ、そっちの浪速区側でということですね。大阪市が解体されて区政改革が進めば、西成区や浪速区という考え方そのものがなくなります。

2階の部分を長距離バスターミナルにして、少し段差があるんですけども、JRと南海と地下鉄と阪堺線とくっつけるという発想ですね。2階よりも上層階には、通天閣に行く需要が多いと思うんで、ツアーバスや観光バスがとまったり、自家用車がとまったりという駐車スペースと商業施設にする。このターミナルを通天閣とかミナミへの観光ゲートウェイ、入り口にするという発想ですね。ミナミに車がたまるといのはなかなか大変で問題も多いでしょうから、新今宮ターミナルのほうで、引き受ける。それと、あともう一つは高速道路があそこを走っていますので、バスターミナルから高速道路へとアクセスできる専用道路なんかは設けられたらいいかなという気がしています。

それと、あとは大阪市内各地に既存の長距離バスターミナル、細かいのがいっぱいあるんですけども、私の知る限りでは、それはもう渋滞の温床やと思うんですね。その辺をうまいこと整理して、そういうところは乗客をピックアップするポイントにして、ターミ

ナルをつくって、そこから大阪市内をピックアップしながら、地方へ飛んでいくみたいな、その起点となるようなバスターミナルをイメージしています。

それで、もとに戻ると1番と3番というのはどうしても、新今宮駅周辺なんで、比較的流動性の高い層に対する需要に対応していく。一方で2のほう、センターの跡地利用のほうなんですけれども、こっちのほうはもうちょっと、やっぱり奥のほうに入ってきますので、人間の住む定着性のある人に需要に対応していくという方向で考えていったらいいんじゃないかなと。私の考えでは、1と3と4あたりでターミナルをつくれば、太子1丁目あたりが国際ゲストハウスエリアなんで、ばっちりかなという感じなんですけれども。

次に、社会政策と絡めてナイトマーケットを創設したいと、私は常々思っています。去年、うちのゼミ生と一緒に台北へ1週間くらいで調査にいったら、現地を詳しく調べて、台北市役所へも話を聞きに行ってきた。日本の現状を見てみると、私の思いなんですけど、道路から街路へ、ロードからストリートへという発想転換が必要だと思います。この何年かの間には働き方の規制緩和はすごくされてきて、もう非正規雇用はいっぱいあるのに、働く場所に関しては規制でがんじがらめ、路上でものを売ったらすぐつかまるみたいな状況です。これだけ働き方を規制緩和しといて、働く場所の規制緩和はないんかいという思いがあります。それと、大阪とか、日本の食文化を考えると、もう間違いなく屋台向きなんです。たこ焼き、お好み焼き、うどん、みな屋台向きですね。寿司も屋台向きです、基本は。てんぷらも屋台向きですね。おそらく外国人旅行者の視点から見れば、もう何で日本に屋台街がないのと、逆にアジアの観光客などからすると不思議がられます。

それと、道路交通法というのがあるんですけれども、道路はとまったらあかんところって定義されていて、みんな動きなさいという。街路活用法はないんですか、立ち止まってもいい、へたり込んでもいい街路という概念が、やっぱり要ると思います。

それと、屋台というのは、台北の寧夏夜市から学んだんですけども、比較的低予算で店が持てるわけですね。そうすると若い人やとか、女性なんかでも、街路で再チャレンジできる場ができるということが考えられます。

あと、もう一つ都市の空間利用でいうと、街路の時空間重層利用、昼間は道路で需要があるから道路、夜になると、別に自動車も通らへんところっていっぱいあるんで、そういうところはもう観光夜市にして、にぎわいを創出するという発想ですね。それが要るんじゃないかと思います。

あと、雇用創出効果、これはもう屋台経営と、あと、意外と清掃事業が大変なんで、清

掃でも生まれるということです。

それで、台北市の経験から私ら大分学んできたんですけれども、当初、放任やったみたいなんですけれども、一時期コントロールして統制をかけたんですけど、90年代の初めくらいから、積極的に観光振興の文脈で育成しようという話になったそうです。その後は観光夜市として成長した結果、もう台湾の観光で屋台は欠かせんというところまで成長しました。そういう状況まで進んでいってるんで、それを見習ってうまいことやっていったらいいんじゃないかなと。

もう一つ、新今宮の場合は宿泊滞在拠点に隣接するという強みがあって、そこから需要だけでも、かなりナイトマーケット街が潤う部分があるということですね。

今、私が思っているあいりん地区の活性化に資するナイトマーケットの候補地なんですけれども、1つは堺筋、太子の交差点から大阪市立更生相談所くらいまでの間なんです。これを地図で確認すると、これですね。ちょっと古い衛星写真なんで、まだフェスティバルゲートが残ってますけど、このあたりですね。ここが太子の交差点ですね。このくらいの狭いスペースですわ。ここよく見ると、3車線とか、4車線くらいの幅があるんですね。ここの片側車線をとめてしまうんですよ。台北の寧夏夜市というのがそういうやり方してるんですけれども、片っぽだけとめて、片っぽに屋台がずっと並んで、こっちは通行しているという形にする。

ちなみに、この道路というのは、本来堺筋をもっと南へ延長するつもりで幅広くとってたんやけど、結果としてなかなか抜けない。夜中になると交通量が非常に減るところなんで、それも十分ありかなという気がしてます。何よりも、位置的に、私が言うてる国際ゲストハウスエリアが近くにあり、そのすぐ横にナイトマーケットがあって、上に行くと通天閣、こういうターミナルならば必ず国内外からの観光客が集まるかという感じですね。

それで、ナイトマーケットをつくるなら、堺筋がいいんじゃないかなというのが私の私案です。

それで、この写真は台北の寧夏夜市の様子なんですけれども、これをみるとインフラ整備してるのがわかります。ここに油を流す排油溝が道路の下に埋め込んであるんですよ、ここに。わかりますでしょうか。それと、ここ見ていただきたいんですけれども、電気コンセントがあったり、水道があったりで、道路の路肩にそういう装置を埋め込んでいるんです。電気、水道、それと、道路の下掘って排油溝。屋台商人側では自治組織つくって、自分らでお金を出し合って、掃除の人たちを雇って、清掃をやっていらっしゃいます。

非常ににぎやかなマーケットで、夜中になると、こんな感じですね。それと、もう一つの候補地は、JR新今宮駅の北ヤード、さっき言うたみたいに、ここは士林夜市のようなフードコート型のやつがええんかなと。もう一つの候補地は、南海の高架下、木津の卸売市場からJR新今宮駅までの高架下、ずっと寂しい道が続いているんですけども、ミナミのにぎわいをもっと南へ延ばしてくるには、やっぱりあのルートが必要なんで、あの高架下がずっと屋台街になれば、ミナミのにぎわいが新今宮までくるんじゃないかなという気がしています。

新今宮界隈に複数のナイトマーケットが併存しても全く問題はなくて、台北の龍山寺の近くなんかは、4つか5つくらいのナイトマーケットがあって、夜になるとすごいにぎわいになります。そういう発想で言うと、別にこれは同時進行しても問題ないかなと。ちなみに屋台に関して、台湾は登録制なんですわ。ちゃんと市に登録していて、どこで営業するのかという場所と一緒に市に登録していてやっています。ほんで、免許が交付されてやっています。

それともう一つの候補地は、チンチン電車の廃線跡なんですけど、ここに天王寺線の廃線跡があるんです。ここも候補地になるんですけども、グランドデザイン大阪のLRTの敷設計画がもしうまくいくなら、この廃線跡にもう一遍LRTを通すという考え方があっていいと思います。それが実現すれば、天王寺あべのからミナミへつながる遊覧LRTの輪のなかに、西成も組み込まれることになります。そうした周回性ができるから、ここをナイトマーケットにするという話もあるんですけど、私はむしろ、ここにチンチン電車をもう一遍通して、LRTの観光回遊ルートをつくれたらええんかなという気はしています。

それと、さっき言いましたように、なんばから歩いて新今宮へ来るというルートも考えなあきません。宿泊拠点になってターミナル化していくと、移動手段となりそうなのは、広域は関空やとか、JR、関西圏はJR、私鉄、中距離バスがあって、市内は環状線、地下鉄、市バスですね。それで、狭域は遊覧LRTと、徒歩にするという話ですね。こうした狭域の移動手段を充実させて、回遊性をこの中でぐるぐる高めればええと思います。さっき言うたみたいに、天安門くらいの広さですから、大した距離やないんで、LRTができれば十分で、徒歩でも移動できる距離です。

それと、この前に発表された臣永さんのマニフェストの中に、「西成にこそカジノを」というのが書いてあって、「えっ」と私は思いました。実は私は、大阪商工会議所の

ツーリズム振興委員もやっていて、カジノの誘致の話は詳しいのですが、そこで話されていると、臣永さんの話にはかなり齟齬があります。一応、有識者ということで、指摘させてもらいますと、あいりん地区というのは、実はすごく狭い地域なんですね。狭い。だから誘致できるものというのは、すごく限定されてくるのは間違いないんです。そんなに大きなものは持ってこれない。将来の人口減予測から子育て世代中心に入れなあかんというときに、どうもカジノというのは、何かそれと違う方向の発想だと思います。それと、既にある非合法カジノをどうするかという問題とか、薬物売買の問題なんか、そちらを先に解決するのが子育てという意味では優先課題かなというのが私の思いですね。

大阪で議論されているカジノというのは、統合リゾート型のカジノなんですね。統合リゾート型のカジノとは、ただカジノだけがあるのではなくて、巨大な敷地のホテルのなかに、モールがあり、娯楽施設があり、スパがあり、エステがあり、そのなかのひとつにカジノがあるという感じです。スケール感をちょっと持っていたきたいんですけど、この衛星画像が見えますかね、スケールが入ってますけれど、この長さが300メートルですね。大体これで、この辺があいりん地区で動物園となります。同じスケールで、これがマカオですわ。マカオのカジノ、私も行ったことがあります、ここです、これだけのスケールがあるわけです。同じスケールで比較するとよくわかります。

これがラスベガスに行くと、あいりん地区全体がベネチアンホテル1個分です。言うてることわかりますか。新今宮界隈がベネチアンホテル1個分の敷地で納まるんですね。これが統合型リゾートで、これ1個だけあっても何の意味もないです。いくつもの統合型リゾートが集まると、地域としての集客力が高まります。もう一つの比較を見ていただくと、これがラスベガスですね。これがラスベガスの一部です。この中にカジノが点々とあります。この大区画がみんなカジノですわ。ラスベガス全域ならば、この範囲を大きくこえて、天井くらいまであります。統合型リゾートの規模がとて大きくて、集まっていて、それ自体が観光資源となっているのがラスベガスなんです。次に、これがマカオですわ。この辺がカジノ街で、こちらは世界文化遺産に登録されている旧市街地ですね。マカオの場合は世界遺産の旧市街地と隣接しているから、このくらいカジノが小さくても、世界中から客が集まるんですけど、一つ一つを見てみると、やはり、かなりでかい区画ですね。これが1,000メートルスケールです。これと同じ1,000メートルスケールで、大阪カジノ構想で議論している舞洲と咲洲を示すと、こんなもんですわ。これを西成区のあたりでやると、どうなるかという、このレベルです。さっき示したラスベガスと全く同じスケール

ルです。これを見ると、ここが難波で、ここが阿倍野なんで、ラスベガスの一部だけで、こんな広い範囲に相当します。なんで、カジノの国際競争に勝とうとすると、このくらいの規模でせえへんかったら、あかんということです。マカオのように何か観光名所と一緒に組んでやるとしても、かなりの規模がいきます。

だから、西成区にカジノをという議論は、スケール感が全く統合型リゾートとは違うんで、大阪商工会議所とかで議論しているものとは、かなりの齟齬があるんで、その辺だけは指摘しておきたいと思います。

後半はすぐ終わりました。

○鈴木座長 ありがとうございます。

では、ここから、議論を始めたいと思うんですが、1点、これもマスコミの方いらっしゃるんで、注意事項というか、臣永新区長のマニフェストというのが、今、出ております。私の理解ではあれは、このタイミングに外に、マニフェストとして出していくものではなかったのではないかなというふうに思っております、あれは、私も最終面接に立ち会いましたけれども、最終面接のための論文というか、審査のための論文というような位置づけなのであって、あの時点で1回終わりの話で、これからまた、いろいろ有識者の意見も酌み取っていただいて、また、新しいマニフェストを多分、立案されるというもので、あれが、何かひとり歩き、多分、今、まちの中でひとり歩きどころじゃないですね。もう暴走しているのかと思いますけれども、それは位置づけとしてはこれ、マニフェストとして出したものではなくて、あれはテストのための解答であると。だから、これからまた、いろいろご考慮いただいて、また、新しいものが出てくるというふうに酌み取っていただきたいというふうに私は思っております。

それでは議論を続けたいと思います。どなたからでも議論をお願いいたします。

また、私からでよろしいですか。

あまり、にこにこするといけないんですけども、本当に夢のある話で素晴らしい、こういう話が前にどんどんいければいいと思うんですが、1つ、ちょっとご質問をさせていただきたいんですけども、ナイトマーケットのイメージは、私も大好きなものですから、わかるんですけども、どうしても、屋台というと、このあいりん地区では特に泥棒市みたいなものがあって、せっかく行政が頑張って撤去したのに、また、こういう話が出てくるのかというふうに思うような方が多いと思うんですが、ここで議論されているのは、そういうものを復活するという話ではなくて、むしろ、住民組織で、それから、治安の当局

もちゃんと入るような形で何かうまいことコーディネートするという形を考えていらっしゃると思うんですが、その具体的に台湾とか、中国もありますけれども、そういうものから見られて、どのような組織形態といいますか、運営形態をとったらいいのではないかという、もし、ご提案があれば、お願いいたします。

○松村委員 台湾で見てきた話では、要は住民組織というよりも、屋台をやっているその屋台街の自治組織があるんですね。屋台は登録制度で、この場所でやるという登録があって、その登録しているのが、例えば、何々夜市みたいな協会があって、その協会に属していて、そのトップは皆で民主的な選挙で選んで、自分らのことは自分らで考えて、市ともその協会として交渉するみたいな形でいろんなことを進めていらっしゃる。

その中に、屋台の登録枠に、空き枠ができたりすると、その権利を売買とかするのではなく、いわゆる社会的弱者が優先的に入れるようにということで、公募が出るんですね。ここが空いたというのが出ると、応募する人がいて、また、その屋台街の組織にその人が入って、メンバーの一員として活動するという感じですね。台北市政府がコントロールしていないところは、少しややこしい人たちが絡んでいることが多いんですけど、観光ナイトマーケットとなっているところは、とても民主的で分かりやすい。龍山寺の裏手あたりで登録していない屋台というか、露天商がいるところなんかやと、それこそ、台北市の役人がいくと、ぱっと蜘蛛の子を散らすように逃げるところもあります。観光ナイトマーケットの場合は、そういうところやなくて、いい意味でコントロールされているということですね。観光用といっても、当然一般住民や国内の台湾人旅行者も利用される場所です。台北の観光ナイトマーケットの場合は、路上で商売することを前提として道路も整備して、そういう組織をつくってコントロールしてやっている感じですね。

○委員 今のお話の流れなんですが、実は地域の方々、（仮称）拡大会議の中でも、この屋台村構想については議論になっていたんですね。きっかけは、小学校横にあった屋台が火災によって消失し、そこの撤去をするというところから始まっており、ある意味屋台をなくすという一連の流れになっているともいえます。

そこは覚せい剤の問題、おっちゃんたちのアルコールの問題など、いろんな問題を抱えていることに対する意識と、このまちのよさじゃないかという意識の間の議論がなされていました。

そこでは、誰が管理するんだということがポイントじゃないかということになり、地域、業者、警察が入る等を含めて、そういう管理の仕組みをつくることで、もう1回復活

させることはできないかという議論がありました。

そして、その場所はどこにしようかということになり、出てきたのが、駐車場や線路跡地でした。例えば、駐車場については、北海道の「北の屋台」で成功していると聞いています。これは、駐車場を一時利用する仕組みで、昼は駐車場、夜になったら屋台になるかというような遊休地の使い方、さまざまな可能性の検討の一つとして出てます。いずれにしても、やっぱり、非合法な方々の問題をどうするかというのがずっとネックにはなっていると思います。

○松村委員 もし、ナイトマーケットをやるのであれば、私有地で要は駐車場みたいなところでやればやりやすいというのは当然なんですけれども、西成特区ということで他地域でも利用できるシステムをつくると、大上段に振りかぶるのならば、やっぱり街路を活用するという発想に変えたほうがええと思うんですよね。道路は通行するもので、止まったらあかんという、そんな道路ばかりでないでしょう。道頓堀を見ている、道頓堀の中心街からちょっと東へ行くと、夜中なんか全然人通りがないですよね。あんなところに屋台街をつくれればいいんです。だから、道路を街路として積極的に活用するという大きな方針を、特区枠で打ち出してもええと思うんですよね。

○委員 すべてを管理することが本当におもしろいものであるかどうかというのは、別の議論としてあるんですけれども、本当はそういう混沌としたおもしろさというのが屋台にはあると思うんですよね。まちが魅力的であったり、豊かになるという意見も当然あるし、おっちゃんたちに、居場所になったりとか、仕事を生み出す場所になっているという意見も当然ありますよね。ただし、このまちの場合、露天が出ていることについては思いが二分しているところがあります。僕なんか、道路の2毛作、3毛作って呼んでますけど、商店街の前でも、いろんな重層的な使い方をしているというのは、まちのおもしろさだなどは思うんですね。ただ、そこで売られているものが不法なものであったりとかすると、町会の方々にとっては問題だと言わざるを得ない状況にありますね。露天も屋台も、そこで起こっていた問題に対して、子どもたちが安心できる環境になっているのかというのが課題になると思います。

ただ、この2者が求めている方向が全然違うわけでないことを最近感じているので、この2つの意見をどうつなぎ合わせることができるかがポイントかなというふうに思っています。

○鈴木座長 ほかにいかがでしょうか。

○委員 屋台の話は、商業的な活性化とか、集客という意味では、前向きプランとしていいと思うんですけども、質問の1つは、釜ヶ崎のコア部分というんでしょうか、釜ヶ崎、あいりん地域のコア部分というのは萩之茶屋地域ですよね。そこは松村委員の考えでは、中のほうにあると、屋台村はやりにくいんでしょうか。

あいりん総合センターの移転をするかどうかという話に絡んでいうと、例えば、萩之茶屋小学校の跡地みたいなところでやってもいいんじゃないかとか、逆に、総合センターが移転したら、移転した跡の場所も、あり得るだろうと。ゲストハウスと近いほうがいいのか、駅と近いほうがいいのかというのもわからなくはないんですけど、そこはどうなんでしょうか。

○松村委員 生活保護の方々の、あるいは炊き出しをやっているすぐ横で屋台街というのが、いいならばという話ですよね。私はもうちょっとそれを、コントロールする形でやりたいと思っています。堺筋でやると、要はそういうところと、仕分けるといっか、すみ分けができますよね。

外国人旅行者や国内観光客が集まる地域と労働者や生活保護が多い地域とのちょうど真ん中にあるので、労働者のおっちゃんも、生活保護のおっちゃんも来れるし。炊き出しをやっているすぐ横で屋台街をするのは、イメージとして好ましくないし、炊き出しに並ぶ側からも私らを見せもんにするんかみたいな話が出てくるでしょう。だから屋台街をすると、よそから人が来るわけですよね。その辺のことを考えると、象徴的にやるのは、やっぱり堺筋やと思います。野宿してはるおっちゃんや、生活保護のおっちゃんの多いところのそばで、外から人が来る屋台街をするのは、どちらからも批判や不満が出てくる話でしょう。

外から屋台街に来る人たちは、別に野宿や炊き出しを見に来るわけではなくて、むしろ見たくないんですよ。だから、萩之茶屋の人も行けるし、太子の人も行けるといっか、真ん中が一番ええから、それで私は堺筋と言っているんです。

それともう一つは公共の道路を、道路やなくて、街路として活用するという発想が大事な点です。

この2つが、先進的なナイトマーケットの枠組みを考えて、堺筋という公共道路で行うという二つが実現するならば、ほかの地域でも西成でこれができるんやから、やろうやってやないかというモデル的な話になると思うんですよ。

例えば、センターの跡地で囲い込んで、フードコートをやっても、既存の制度への挑戦

という意味ではおもしろみがなく、普通やんで終わりですよ。にもかかわらず失敗したら、ああやっぱり失敗やったなで終わりです。ところが、街路を使ってということになると、他地域でもできるかもしれないという期待感が高まり、波及効果あることでしょう。○委員 今のご説明はご説明で理解はいたしました。いろんな意見があるのかもしれませんが。

もう一つ、ターミナルというお話があるんですけど、ターミナルという言葉の意味合いを、もう少し明らかにしたほうがいいのかなど。おそらくここで言っているのは別に終点という意味じゃなくて、商業ゾーンにするという意味合いなんだと思うんです。私個人は、今のご提案に関しては、疑問というか、ちょっと違うじゃないかなという意見を持っているんです。まず商業施設的なものは、屋台とかは簡単ですけど、ハードを伴ってくると、失敗のリスクが結構あるということですね。

特に、長距離バスターミナルというのは、日本の場合ににぎわいの創出にはあんまりならんのではないか。今、バスターミナルがあるのは、大阪駅の北側とか、阪急の梅田とか、それから、湊町とかですけど、全然、にぎわっているようには思えないですね。時間帯は限られていて、昼間はやっぱり電車で移動してる人が多かったです。特に湊町のO C A Tは、あのビルつくったときに、磯村市長というか、当時助役ですね、あんなでかいビルを建てて大丈夫なんですかと私、市政担当記者をしていたときに聞きました。すると「いや、高速バスターミナルができるんだ、高速の出入り口と直結して、大拠点になるからにぎわうんだよ」と胸を張っておっしゃいました。けれども、結果は全然だめでした。

というようなことで、実はバスというのは、あんまり設備投資的なものが要らなくて、バス会社がここは使えるとか、客が集まる、集まらないということで、いくらでも動かせますよね。新今宮に外国人はある程度来られるとしても、日本人の移動を考えると、それほどの需要があるのかな。それはバス会社が判断することでしょうという意味で、ちょっとコアにするにはしんどいかなと。

かといって、でかい商業施設、例えばイオンモールみたいなものをこんなところにつくるのかというと、なかなかそういう話にもなんないんじゃないか。そこはやっぱり失敗するリスクも考えないといけないと思います。

もう1点は、新今宮の北側の市有地。教育委員会の所有で、たしか30年ぐらいも使っていない。一万二、三千平方メートルありましたか、JRの駅の北側、大きな土地で、これをどう使うか、たいへん大事な話だと私も思うんです。

個人的な意見としては、大学の分校キャンパスとか病院とか、そういうもんに向いてる場所じゃないか。病院というのは、社会医療センターがいまあるんですけども、もうちょっとしっかりした病院がほしいなと思ってまして、そういうものをつくるのが、医療扶助の適正化みたいな意味でも、重要じゃないかなと。ただ、病院があいりん地域のコアの部分にある必然性はあまりない。ちょっと外れると一般の患者さんも来るだろう、救急もできるだろうということで、病院に使えるんじゃないかなと。

大学も、社会問題系のキャンパスをつくったらいいんじゃないかな。これは教育の会合の時に議論すると思いますけれど、少しコアからは離れたほうがいい。病院と大学の両方をつくっても、まだ、ちょっと余るくらいのスペースはあるとは思いますが。

一方、新今宮駅の北側の土地に屋台をつくと、人の動きが面白くないような気がします。堺筋というのは、私はそれなりに面白い、使えば面白い。あるいは堺筋じゃなくて、この道路は何ていうんですかね。新今宮駅前の東西の道路は。そこにも夜のスペースはあるといえはるように思います。

○委員 補足的な。まちの人が言っておられる提案というのは、僕はそういうのを言う立場だと思いますので、やっぱりセンターの跡地についても、議論があって、駅前の開発というのは、もうかなり前から研究会の構想案でも出ているんです。どうしていこうかと、関西空港があって、いろんな人がそこで乗り降りして、その開発に伴ってやっぱりまちを変える1つのきっかけになる、起爆剤になるじゃないかという期待を持っておられる方もいると。ただ、そのときの案は幾つか出てました。その1つはやはり、このまちにあるやっぱり問題を解決するための拠点みたいなものをやっぱり当然出て、例えば、結核関連の病院という、市大があるんですけども、ここに国際的なそういう専門病院っていうんですかね、そういうものをつくってはどうかという案とか、それから、バスターミナルの案があったんですけども、南のほうがいいという話ですね。北にできると、また、南がほってかれるみたいな、そういう話もありましたし、それから、今、大学の話も言われてましたけれども、ですから、ぜひ、この間お見せした案の中で、提案がいろいろ出てますので、それを受けて、できそうかどうかというような議論もちょっと、進めていただければなというふうに思います。

○松村委員 ターミナルにほしいもの、想定されるものは、いっぱい言うていいですよ。ターミナルにできるスペースの中に何が入るかという、スペースの問題があるんで、それを整理していくのが一番常識的な話です。別にフードコートも全部要らんし、バスもそん

なに大きなところは要らんかもわからへん。ただし、OCATが失敗するのは、わかりますわ。あそこまで移動するのは大変ですよ。あんなとこつくって、まともに採算とれる思ったところが問題です。新今宮の場合は、関空直結ですし、隣に宿泊拠点あるから、OCATとは意味が違うような気がします。宿泊拠点の横にあるというのは、大きいですよ。

○委員 ここは座談会の場合なので、特に深く考えてなくても、ここでちょっと思いついたことを言ってみようかなと思うんですけど。その屋台なんですけど、松村さんもちよっと言ってましたけれども、私は2つあってもいいんじゃないかと。2つできるんじゃないかなと思うんですよ。というのは、1つは堺筋のそれは非常に魅力があって、外国人宿に隣接してますので、欧米人が来るとどうなるか。これはもう、中央区のミナミでも証明されているんですけど。私はブリティッシュ・パブによく行く時期がありましたから。欧米人が来るということは、日本の若い子たちが来るんですよ。まず女の子たちが来るんです。女の子たちが来ると、そこに必ず男たちがまた追いかけてくるんですよ。ですから、そこには独特の外国人と若者が融合する文化ができそうな気がしますね。そういう意味では、扱う商品もまたちよっと違うでしょうけど、そういう意味では、そのエリアは非常におもしろいなと思います。

ただ、じゃ、そこに釜ヶ崎のおもしろさというか、よさを表現するようなものになるのかどうかというと、ちよっとずれるかもしれないなとも思うんですよ。

というのは、釜ヶ崎のおもしろさというのはそれこそ、予想もつかない出来事に展開していくということ。そこら辺の創造性はすごい。生活ニーズに基づいたものですけども、淀川の鰻持ってきたりとか、シジミ持ってきたりとかも含めて。だから、別なものができていくんじゃないか。そして、それはつくったほうがいいんじゃないかと思うんです。一番目の、堺筋なら堺筋でちゃんとコントロールされてやってることに見習って、2つ目のそこもちゃんとルールをつくって、それが上手に運営されていけばいいわけですから。両方に対して、ニーズがあると思いますし、だから、堺筋でそういうのをまずはやってみればいいと思いますね。

あと、どうしても必要なのはやっぱり、もう何回も出てますけど、こういう席に警察の方が見えて、協力していく体制についても一緒に話し合っていくことがどうしても必要じゃないかなというのを改めて思います。

○松村委員 実はちょうど、この堺筋で想定しているのは100メートルなんですよ、私が想定しているの。100メートルなんで、できんこと言うているんやなくて、ほんまにでき

そんなことを言っているところがあります。この100メートルは、薬物売買の取り締まりの象徴的なところとしても位置付けられます。加えて、その堺筋を街路として活用するというのは、今まで日本ではない潮流なんで、それでいうと特区らしいかなという気がするんですけど、既存の道路を活用してますよ、街路として活用してますよという、それを対外的にも発信できて、成功すれば、成功事例にもなります。100メートルの幅で、例えば、5メートル幅とすると、20店舗で20掛ける2で40としても、比較的スモールマネーで起業したいという意欲的な若者が、ここに全国から集まってもらって、この地域の枠をつくって集まっていいんですけれども、そうした感じのものができて、それがうまいこと成り立てば、絶対、発信力になりますよ。

私が思っているのは、ナイトマーケットが観光振興にも役に立つし、そのナイトマーケットが線として、この線沿いを立地誘導するんやったら、それが観光振興や集客の起爆剤にもなるわけです。屋台街ができれば、この線沿いにホテルがたくさんあって、福祉マンション化しかけているところもあるんですけれども、それがもう一遍ホテルのほうへ戻ってきてくれるという感覚も持っています。だから、象徴的になるんかなという気で提案しています。

○委員 屋台村の話には基本的に私も賛成というか、おもしろいなと思っています。しかし、ちょっと気になるのは、外国の観光客、日本の観光客も今後増えるという予測は多分当たっていると思うんですが、今後、人が増えると、人のその求めるニーズも多様化すると思うんですよね。そういう意味で、一方でこういう屋台系のフードも大事だと思うんですが、他方で、もう少し価格が上くらいのものとか、多様性のようなものも、どこかに組み込んでいくような仕組みが要るかなと思うんですけれども。

山王1丁目、2丁目あたりにエコミュージアムですか、基本的にここは日本の伝統的な住宅街のような形で残そうということだと思ってるんですけれども、それはそれでいいとしても、住む場所と商業的なものをワンランク上くらいのものとして位置づけて開発していくことでやったほうがいいと思います。それと、一方で、実際この地域の長屋の居住水準の問題とか、防災の話もあったと思うんですけれども、その辺の改善等とセットにしながら、今言ったような形での開発を組み込んでいくのがよいのかなと思ったんですけど。

それともう一つ、関空からのアクセスがいいという話でターミナルの話がありましたが、一方で天王寺も実はそういうことで今機能しているし、でかいビルも建っていて、そこでの差別化をどう図るかということが必要だと思います。天王寺との一体的発展という観点

と合わせて、差別化という観点も必要だと思います。このところの説明が十分なかったと思うので、その辺をお聞きしたいなと思ったんですけれども。

○松村委員 差別化と言うよりも、私は一体化ですよ、もう何か、天王寺あべのからミナミにかけての地域は一緒にええんちゃうかなという感覚があります。先ほどから言うてるみたいに、すごく近いんですよ。歩いて10分から30分なんですよ。もしL R Tが通ったら、多分すごく近い距離になって、すごく遠いという印象を持たれている皆さんは、おそらく驚かれると思います。私のように地理学を学ぶ人間からすると、感覚的にこの地域はとても狭い、ここからここまでがほんの700メートルですよ。

○委員 いや、近いんですが、間が暗いんですよ。間が何もありませんよ。

○松村委員 無策ですね。無策です。本当に。でも、ハルカスができたら、灯台のようにハルカスの明かりで、多分たどり着けるような気はします。もう一度確認したいのですが、天王寺あべのからミナミにかけての地域は、天安門、故宮博物館、前門という地域とほぼ同じなんです。この地域は普通に歩きますからね。この空間スケールを皆さんは理解されていないから、問題なんです。海外から来ているバックパッカーに限らず、普通の旅行者やったら、通天閣からなんばまでは皆歩きはりますよ。単に移動するために地下鉄に乗ってお金を払うんはあほらしいって、歩く人の方が多いで、それが普通の感覚です。歩く途中のところにおもしろいもんがいっぱいちりばめられていたら、むしろ歩くことは苦痛ではなく楽しみに変わります。それと、決定的に新今宮と天王寺が違うのは、やっぱり関空とつながる南海電鉄の存在が大きいですね。南海が関空と直結していて、宿泊施設の集積地点が近くにあるというのが、これはもう2大強みですよ。

○委員 国際化とか、観光化に伴う20年後のこのまちの姿を考える時、例えば萩之茶屋地域、あいりん地域にとっては、その影響を受けながら、どう変わっていったようなイメージですか。例えばこの提案をまちの人に伝える場合に、国際観光化によってこう変わるよ、というときにどのように伝えたらいいでしょうか。

○松村委員 まず1つ、今まで労働者がたくさん来てて、僕は商店街をイメージしているんですけれども、労働者向けの商店やったんですよ。それが、労働者がいなくなって、生活保護になって、お客さん減った。次来るのが、外国人か国内の観光客、それに向けたやっぱり対応していったら生き延びようとするなら。

○委員 つまり、住まいというか、定住ではないかもしれない。

○松村委員 旅行者ということに関すると、定住ではないですね。定住ではない。それを

できたら、太子1丁目とその周辺でゾーニングして、その辺の集まってもらおうという感覚ですね。住まわれるところは、もっとほかにつくるべきですよ。山王1丁目、2丁目には、既に住んでいらっしゃる方もいてるんで。

今あるものをつぶしてやりかえるというのは、やっぱり大変なんですね。山王1丁目、2丁目なんかでも。そうした跡地にだれかが入るかという、私のイメージではQ's MALLができるまでのぐだぐだが、頭の中に浮かぶんです。もう何十年も昭和48年からずっと止まっていたQ's MALL、今ようやくできたから、ええなあという話になりますけれども、いったい何年かかってんねんという話ですよ。それでいうと、山王1丁目、2丁目でそういう動きをすると多分大変やし、理解も得にくい。そうすると、堺筋なんか、道路をとめるだけやから、関係各所が了解してくればいけそうな感じがするんで、何か、白地図にぱっと新しい絵を書けるようなイメージがあります。

○山田理事長 天王寺と今、あいりん地区いうか、西成とどう差別化とかいうような話なんですけれども、一番違いは価格、値段なんですよ。今、ハルカスが呼んでこようとしているマンダリンホテル、これは1泊3万円を目指してる。その1けた違う3,000円が西成区ということで、これ以上強い武器はないんですよ。3万円で泊まるのと3,000円で泊まる、どっち泊まるんや、寝るだけやったら、どっちやねんというような話になると、絶対西成区は負けない。これは強いですよ。特に、萩之茶屋地区はこれから1,000円、1,500円で泊めようとすりゃ、これは強い。太子地区から見ると、萩之茶屋地区は非常な競争力を持った地域と、こういうふう考えておる。

ただ、食べ物でも同じように、ウナギが2,500円、3,000円するのと、1,000円ですると、そら価格は違う、値段が違う、競争力がそこで違ってくるというふうな考え方ができるんじゃないかなとこう思います。

○委員 今の理事長のお言葉、1,500円とか3,000円という、もう競争力を持てるという前提にやはり、極めて高密度に人が利用できる構造になっているまちが、この今見せてるあいりん地域であるということ。しかも、都市計画のゾーニングはすべて商業地域という、容積率何%ですかね、最高は600ということすごいです。特別にこういう密集市街地も抱えてもこんな形で商業施設に指定されているんですが、特区を今後進めていくときに、狭小な地域にコンパクトにいろんなものを詰め込むということをどう売りにするのか、いや、それは防災の問題とか、いろんな問題がやはりもうちょっと緩和していくのか、私はどっかで議論していただきたいなと思っています。

萩之茶屋2丁目というのは、実は、人口密度が9万1,000人なんですね。9万1,000人ってなかなか想像しにくいかと思いますが、日本で一番人口密度が高い区は東京の中野区、2万1,000人、西成区は全国で9位の2万700人くらいで、2万人台くらいというのが、一番稠密な人口密集地区なんです。香港の一番すごいところは6万、7万という密度ですので、萩之茶屋2丁目というのは、9万で断トツに今、すごい高密度なんですね。それを可能にしているのが、さっきの簡易宿所の4.86平米7、これ3畳という基準ですね。今、いろんな狭隘な住空間をどう使っていくかということで、今、生活保護の問題とかもかかわっているんですけども、基本的に今、4.86というベースが1つの生活保護の方々の中間ハウジンである無料低額宿泊所は、居住基準としてたしかその辺のベースで議論されます。1つ知ってほしいのは、これ、4.86というのが、果たしてどういう水準かということ、西成区として、この問題は特にコンセンサスとして、それを生かそうとするのか、それに規制をかけるのかということに関しては、コンセンサスを得たいなと思ってます。

その次の基準は4.5畳の、これは7.42平米ですかね、そんな基準があつて、4.5畳、それから、高齢者1人当たりの最低居住水準というたら15平米なんですね。この15平米というやつはベランダとか、いろいろ込みでやっていますけれども、この7.4平米か15平米という形で、いろんな居住の最低面積の問題とか、この簡宿の利用の問題が語られる。僕はどっちかいうと、やはり、狭いことを生かしたまちづくりというのをベースとして、あるいは売りとして考えていきたい。ただ、この狭いことに関していろんな問題がずっと言われ続けているので、簡宿というのはそういう意味では、居住の極限形態を1つは今のよな形で有効利用されている。また福祉アパートというのも、そういう形でその3畳の狭さを補う共用トイレとか、便所とか、共同浴場とか、いうことでカバーしているとか、なので、この辺どっかで9万人という人口密度を一体どこまで下げるのかというあたり、売りにもしていくというあたりの着地点を考えていくということが必要かと思います。

それに関しますともう1点いいますと、さっきのエコミュージアムという、山王1丁目、2丁目等々、太子もそうなんですけれども、非震災地域が結構広がっていますが、基本的にここの防災の問題等々考えて、新築という形での市街地更新というのが非常に難しいですよ。もう接道が4メートルないとか、そういうのがざらにあります。またしばらくはあべの的な巨大再開発方式をとれない限り、これやろうと思ったら、30年、40年かかって、とてもコンセンサス得られるところないので、しばらくはこの修復型、改築で内部空間をうまく、改築しながら、いろんな用途に使っていくという、市街地修復型の再生

をすすめてゆくというコンセンサスも要るのかなと思います。西成区全体、特に北西地区のほうの密集市街地が、密集市街地改造のいろんな助成とかでやりかけているんだけど、なかなか成功しなくて、前に進まないところがあって、また密集市街地クリアランスしかけて、結局とまってしまっているという、ちょっと金の無駄づかいみたいなところあったと思います。基本的には山王のほうの密集市街地というのは、この北西地区と同じ問題も抱えつつ、取っ払うことができないけれども、しかし、なくすこともなかなかできないと、なると、修復プラス人の支援というのを加えた、あるいは、外から人を呼んで、人が入ってくるという形での、まちづくりというのがベターなんかなと思ってます。

あと、最後1点ですけども、国際集客に関していいますと、私、松村さんとか、山田さん等々もお世話になって、もうここ六、七年、大学におりますので、国際学会で来る著名な教授たちにも泊まっていたらいいですね。実に好評です。2万円、3万円、いろんな高級ホテル泊まって、その次、西成行ったら、もうこっちがいいから向こうの2万円のホテル要らんから3,000円でええという方が結構おられるんですね。こちらのフロントの雰囲気とか、地域の地べた感が気に入られてます。

そういう方々が、本来は、都市問題に関心の高い研究者が多いのでそういう関心があるんかもしれませんけれども、台湾に帰られたり、タイに帰られたり、アメリカに帰られたり、オランダに帰られたりして、西成ということをして、正しく都市問題の観点からとらえ、グローバルに伝えてくれるんですね。

だから、そういう外国の方というのは、西成での学びの体験を自分の言葉でそれぞれのところに、自分の体験をうまいこと、伝書バトのように知らせていってくれるので、そのあと、泊まったホテルのきれいなアコモデーションと、いい何か受け取り方をさせていただいたら、それがまた、口づてでちゃんと海外に伝わっていくということもあると思うので、そういう交流人口の持つ、国際的な交流人口の持つポテンシャルというのはすごく高いと思います。

ですから、そういう形で大学の誘致とか、いろいろありますけれども、いろいろな大阪を知っていただくためにも、そういう方々の誘致というのは非常に重要なことというふうに思いました。

○鈴木座長 ほかにいかがでしょうか。

全体を通してでもそうですので。

○委員 今、水内委員から発言のあった、海外から来るというところの話と、学生さんが

釜ヶ崎へ来たいと言われたときに私も紹介しています。また、いろんな場所の案内しながらですけれども、案内するというなら、夜は新世界のしかないんですよね。その中で、松村委員が言っていたように、釜ヶ崎の横の堺筋、夜の屋台という発想は全く、今日、ああ、そういうことができるのか。もし実現したらというようなイメージができました。国内でも、30万人の方、太子に来られている。それやっぱり発信力があったということですね。釜ヶ崎っていうか、西成に行っても、大丈夫。そういうのをもっともっと、積極的にアピールする必要がある。他市のことですが、豊中市の庄内で庄内バルが開催されています。きちっと、地域がいろいろなところから組んで、やっぱり宣伝やっていくっていうか、そういうのを釜ヶ崎っていうか、西成というところで、行っていくという事も1つの手段かなと思って、考えていました。

○松村委員 先ほど水内先生から出た、山王1丁目、2丁目を、今住んでいる空間を保全というか、てこ入れしながらやっていく、その辺で聞きたいんですけども。うまいこと、まちづくりでそれを生かして、何かモデルみたいなつくれませんかね。ああいう、密集老朽化長屋街をこういうふうに改善していくんやというモデルを、何か都市計画のほうから。

○委員 実は大阪市さんはそういう実践を空堀や中崎町などにおいていろんな実践事例は増えてきていると思います。空堀の場合、マイルドホープゾーンということでやってます。この地域でも、マイルドホープゾーンとしてやってもいいかもわかりませんね。長屋の耐震補強するのにかなりの費用がかかることがあります。また、補助金が使える技術メニューが決められているんですね。

また、補強する案もあれば、補強ではなく、命を守るというユニットを入れるという案もあるなど多様な手法も検討可能です。この点については、この地域でもかなり可能性はあるんじゃないかなと思います。使いながら改修とか、修復型のまちづくりを推進するというのは、実はおもしろい展開だと感じているところです。

○松村委員 その点を山王1丁目、2丁目あたりで、うまいこと組んで。

○委員 そうですね。

○松村委員 その実績を何かいろんな人に見てもらって、住んでいる空間を見ながらうまいこといっていますよ、こういうふうになっていますよというのを見てもらおう。日本は自然災害多い国で、昔こういう歴史の一時期にこういう住宅がたくさん建ち並んで、立ち行かなくなってねんけども、こういうフレックスな対応方法もありますよという見せ方も、十分成り立つと思うんです。

○委員 たまたま今、豊中でかかわらせていただいているプロジェクトは、文化住宅の空き家を使った「コレクティブハウジング」に改修する事業ですけれども、ここでは空き家にDVを受けた母子家庭や福島からの避難者がお住まいになっています。仕組みとしては、空き家の何戸かを提供すると共に、その内1戸を共用サロンとして活用するもので、そこに生活支援を担うパーソナルサポート機能を組み込んで居住者をケアするストック活用です。この地域にはまさにいろんなストックがありますから、そのストックのマネジメントができれば、この地域発信型のおもしろい事例がいっぱい出てくるんじゃないかなと思いますね。

○委員 つまらないことを言いますが、私はさらにこういうこと考えるときがあるんですよ。30年後だとします。例えば。かつてここに釜ヶ崎という世界が、労働者ワールドがあったと。日雇い労働者が全国から集まり、仕事を求め、いろいろ苦しみもし、人々はそこで一生懸命いろんな改善のために努力をしたというような、そういう姿というのは残さなきゃいけないと私は思っているんですよ。そこまで想定して、今の例えば、外観ですよ、中身はいろいろ変えていかなきゃいけないですけども、例えば、簡易宿泊所にしろ、そういったその当時を残すようなものの外観は、その30年先を見越して、上手に残しながら、状況を変えていくというような。だから、密集市街地だけの問題じゃなくて、典型的な萩之茶屋の1丁目、2丁目のあたりの風景というのも、逆にそれは学びの対象になっていくのかもしれないので、そういうことも考えるときがあります。

だって、こういう釜ヶ崎というものができて、1904年にあの辺に4軒の簡易宿泊所があって、100余年の時を経て、今、それこそ釜ヶ崎って名前も消えていくかもしれないような1つの歴史的な転換点にあって、そのことの意味というものを、やっぱり、目に見える形で残して、それを基盤にして、その次の展開としての今の世界があるんだよと将来は言われるように、今のかたちもいづらか残したいという気がしてしょうがないんですけど。

○委員 私もちよっと、暴走しますけれども、西成区さんの企画しているイメージアップ計画のことなんですけれども、やっぱり、まちの歴史とか、系譜をきちっと伝えていって、今、西成区の置かれている状況を理解しつつ、また、ポジティブに売り出していきたいなということを計画されていると思うんですよ。西成区というのは、そういう点では大阪で一番とか、日本で一つか幾つか釜ヶ崎以外にも持ってます。

実は、この天下茶屋のこのまさしくこの区役所の建ってる場所は何が日本一かというと、

ここはもともとロシア人の収容所があったところで、かなり広大な収容所だったんですね。それを払い下げるときに、今の今宮村の人たちが考えて、耕地整理をしようということで、割と四角な、この位置ができたわけですね。そのとき、松とか、梅南とか、橘とか、そんないろいろ佳名をつけて、まちづくりしていったのが、明治40年なんですね。公地整理型の宅地開発では物すごく古いところで、都市計画の走りみたいなところなんですね。日本一とちがって、日本で最初ってやつですね。

それが災いして、都市計画に基づかないかなり狭い街路になっちゃって、1区画100メートルで区切ったものやから、ものすごく路地型の街区ができてしまったんです。都市計画の歴史の中で、明治30年にたった700人のムラが25年後に7万人の街に急成長するという、これもまた、日本一の人口増加率。大正14年に、100倍に人口増加したという、すごい、移民のるつぼというか、そういうところなんです。

今、山王1丁目というのは、その次にできた天王寺の耕地整理で大正4年、飛田の遊郭とちょっと前に耕地整理でつくったこの由緒ある天王寺耕地整理組合が整備した地区なんですね。ですから、そういう意味で、大阪の都市計画の系譜みたいなものを持ちつつ、それが都市問題と同時に歩んできたという系譜があり、これもやっぱりきちっと学んでいくという仕掛けを入れると、このエコミュージアム構想とかが非常に生きてくるのちやうかなというふうに思ってます。

今日は余り議論出でませんでしたけれども、チンチン電車というのも、非常にいい既存の資源があって、しかも、上町線のほうが恵美須町まで伸びて、すぐその太子の交差点の北までくるという、新世界突っ切って恵美須町行くななんて案も出てますから、このLRTというか、路面電車も使わない手はないです。

堺市はかなり熱心で、堺市長も寄附も始めて結構熱心にしてますけれども、せっかく、新しい低床電車を大阪市内、ちょっと、下、底すって走られへんていうようなことがあって、なかなか入ってこないといわれてますけれども、こういう路面電車というのもまちとともにできたものですから、そういう意味で、都市の歴史というのはきっちりと見られるところなので、そういう仕掛けさえあれば、すごい学びの対象となる。歴史の道とか、いろいろ考えられてますけれども、そういう都市問題もわかるというような形でまちづくりを学ぶことができると、こういうのもできていったらいいんじゃないかなというふうに思います。

○松村委員 水内先生とよくまち歩きして、私は思うんですけれども、一般の観光客がそ

こまで深いところは見ないんですよ。ただし、深いところまで見たい研究者もたくさんいてるんです。でも、一般の普通の観光客、外国から来た観光客でも、実はこの辺の話って、見ててやっぱりおもしろがりはるんですよ。何かというと、風景が今まで自分の国にない風景が連なっているんで、それで、十分見て耐えられるんですよ。郊外型の住宅なんかだったら、それは無理なんですけど、わくわくするまちなんですよ。そういう意味でいうと。だから、その難しい説明を抜きにしても、何か絶滅危惧風景っていうんですか、そういう形で残っているところが十分通用するところなんで、だから、私は、残して、うまいこと保全して使える方向へ持っていったほうがいいというんです。

簡宿でもそうですよね。ああいうホテルの形態というのは、海外に余りありません。昔ながらの簡宿というのは、やっぱり靴を脱いで上がるみたいな、それが外国人旅行者にとってはある種の観光資源ともなり得るんです。それが、成り立つ大きな要因は何かというと、やっぱりここが滞在型の宿泊拠点であるということです。これが、日本にバックツアーで1週間や、2週間来てすぐ帰ってしまう人やったら、絶対にそんな関心何て生まれません。ただし、インとアウトだけが決まっていて、その間は自由に歩き回れる、時間的に余裕がある旅人がおると、そういうところまで目がいくんで、十分成り立つ話になります。この現象は、逆にいうと、ここでしか成り立ちません。私の感覚でいうと、いろんなところで呼ばれて、国際観光振興できないかという話をするんですけども、大体無理、無理としかいいようがない。あいりん地区には色々な条件が整っているんで、ここならば外国からも旅行者くるけれども、ほかでこれを誘致しようと思っても、けえへん、誰がくるねんという思いがあります。それができるからこそ、私はこの地域に可能性を感じてるし、かつ重要やと思っているんです。

○鈴木座長　そろそろ、お時間が近づいてまいりました。それで、最後に非常に今回、大胆な案で大胆かつ、非常に詰められた案をおっしゃっていただいて、私もわくわくして、大変希望の持てるお話だったんですが、どうしても、この場の議論はバランスをとろうといたします。ですから、いろいろ意見もあったと思うんですが、決して、否定的な見方ではなかったというふうに私は最後に思います。

それで、幾つか注意しなきゃいけないなと思ったのは、この議論は割とフリーハンドで自由でやっておりますので、今回はこの立地でここを使ってこうしたいみたいな話がばんと出るわけですけども、それで別に合意とっているわけじゃありませんので、そうじゃないと、先にしゃべったもの勝ちになっちゃいますので、そういうことは全然考えてなく

て、ファースト・ベストと経済学ではいいますけれども、まず、第1案として、これが一番だというのは、全体のバランスをとって一番だというんじゃなくて、このテーマについては、ここはこれを使うのが一番だという観点で、話を今回していただいたと思います。

これは毎回違うテーマで、この北側の新今宮の北のところは私は病院にすべきだという話があってもおかしくないし、大学だという議論もあってもおかしくないし、それぞれ毎回、ファースト・ベストでお話をすればいいんじゃないかというふうに今日聞きながら思っていて、また、それを全体としてどうするかという話はまた最後にまとめる段階でいたしましょう。つまり、そのときに、2本も3本も案があっても多分いいと思うんですが、もちろん、余り地元の議論と乖離するのも全くこれは望むところではありませんけれども、でも、そのある程度自由に議論をしないと、常に制約をもって考えると、案がほとんど今あるものから新しいもの出てきませんので、だから、割と自由で議論をさせてくれ、ただ、それで、縛られているわけではないというふうなコンセンサスで、これからの議論をしていって、最後にいろんな個別テーマで重なる部分がいっぱい出てきますので、それをどうするかという議論は最後のほうで全体をまとめてという話を、つまり、前回のありむら委員の議論でいうと、大きな話をして、個別のテーマをして、もう1回大きなところに戻ってこようというところで、その全体として何をどこに置くみたいな話も少し具体的にしていければなど、だから、ある程度話を今日、多分、ご覧になっていて何かいつら勝手な議論をしてんねんというふうに思われた人が、かなりいらっしゃるんじゃないかと思いますけれども、わざと勝手な議論をして、少しかき混ぜるというか、こういうことをしないと、常に制約をもって議論をしていたら、新しい議論できませんので、そういう意味で今回はフリーハンドの議論をしたということで、また、それがちゃんと着地するというか、地に足着く議論はまた、これからやっていきますので、どうかそういう目で見ていただければなというふうに思います。

それでは、今日は大変長時間の間を大変密度の高い議論をしていただきまして、どうもありがとうございました。それから、傍聴していただいた皆さんも、これだけ遅い時間までつき合っていただきまして、どうもありがとうございました。

それでは、これで終わりたいと思います。

○柴生課長 どうもありがとうございました。長時間ありがとうございました。

本日はこれで終了でございます。次回、第4回目でございますけれども、7月20日の金曜日、時間としましては、午後6時から開催の予定でございます。また、ご来場いただ

きます際にはよろしく願いいたします。

本日は、どうもありがとうございました。お疲れさまでした。